麻生路郎主幹

川柳雜誌

新春號

川柳雜誌第三卷第一號目次

感想・評論

三十年計劃　麻生路郎
川柳は詩界のバックである　坪内逍遙
私見二つ　林田馬行
「懷手」時代　三好革郎

研究・其他

柳樽通釋「異見の異見」を讀みて　西原柳雨
同　竹馬居主人
漫畫虎々漫談　吉岡鳥平
川柳机鳥森丸三評刷物　岡田三面子
句作上の常套語　麻生路郎
南陽藝妓の試驗　食滿南北
人間は專制性の動物である　大島濤明
漫畫此月が產んだユーモア　柴谷柴舟

柳樽通釋素讀　蛭子省二

創作

近作　麻生路郎
川柳塔　關本雅幽
同　森田輝翠
同　黑木莢豆
同　吉川啞人
同　林田馬行
同　庄万よし
同　西垣松雨
同　德田双柳
同　岩崎柳路
同　太田一聲
同　麻生葭乃
同　三好革郎
同　塚崎松郎
同　橋本二柳子
同　蛭子省二
食後小句

募集句、近作柳樽、會報、各地柳壇川柳世帶道具番附、新戎橋より川柳家の戸籍調べ、川柳書架等

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　大正十五年一月一日發行　大正十四年十二月廿五日印刷（毎月一回一日發行）

水了軒のお辨當

旅行に…集會に

山をほめ海をたゝへてお辨當

賀正

大阪梅田驛前

水了軒

電話（北六四〇番）（北一八三四番）

同人（はいろ順）

岩崎柳路　井上刀三　馬場月兎　原史風　林田馬行　橋本二柳子　西垣松雨　德田双柳　太田敏底郎　河南放一馬　亀井花童子　高橋かほる　高橋古城山　竹内多聞　高見柳骨　塚崎豆郎　黒木松　矢田右大臣　柳川洲馬　松本助六　藤本卯之助　駒井美の作　麻生路郎　佐々木獏闇乃　三宮好一郎　森庄萬よし　關本田輝翠　雅幽

近作

麻生路郎

親切をおしつけた事さへも悔ひ
善人が滅びつゝある寂しさに
炭ついで炭ついで女をうらむ
一ンち違ひで廿圓が死んでしまつた
火の用心火の塊となつて消ね
ごの子もごの子も息災でお元日

三十年計畫

——田中五呂八氏に與ふ——

麻生路郎

ごぶさたをしてゐることは僕も同樣です。實際私達は用もないのに單なるおたづね狀を出すほどゆつたりとした狀態におかれてゐませんっだから云ひたいことがあれば幾らでも書くが別に何もかくことがない時には何もかきません。書くことを許されない時も同樣です　そんな時には端書一本出さないのです。それでも別に親しみが薄れることも薄れたとも思へません。

さうした狀態が永久に續けば親しみが薄れたも同樣だと云へば云へぬこともないがそれはごう解釋されても差支はないのです。一度も逢つた事のない友人が私には幾人あるか知れませんが、句を通じて書いた者を通じて　或は個人的な通信で逢つたと同じ程度の親しみを續ける事が出來ると思ひます。あなたにしたつてさうではないでせうか、あなたには是非逢ひたいと思ふけれ共逢はずに死んでしまつたからとて別段それがために親しみが薄くなつたり厚くなつたりすることも思へません　私にとつては昔の人々や　異國の人々や書物の中の人物と同樣に考へることが出來るからです

あなたが「氷原」のために闘つてゐられる態度　同志のための詩集を出すための努力などに對しては涙ぐましさを感じます。けれども、あなたの評論や創作に對しては僕は唯嚴正な一批評家の立場で拜讀してゐることに心づきます。

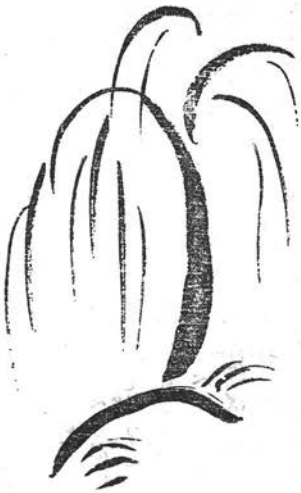
あなたの眼から見た僕のやつて居る事は實に齒痒く、もどかしくあるかも知れませぬ。多分さうだらうと思ひます。僕にはよく判ります。が、併し、それは立場の相違であるから僕は案外牛

氣で現在の態度を續けて行くのです。『川柳雜誌』も來年からは積極的に進む由の手紙が半文錢さんから來てゐました　僕は待つてゐました。あなたの雜誌もそろ〳〵第　期の實質時代に入る頃になつたと思ひます　初心者は初心者として幾人でもいゝから個色的な作家を自由に延ばさしてやる義務があなたにもあると思ひます一この事ですが、この雜誌が君の期待に副う時代は仲々遠うからうと思ひます。積極的とはどう解釋されたのか知れませぬが私は年中積極的にやつてゐる積りですし、一寸馬力をかけて見ては悲觀したりするやうな態度は採りたくないと思つてゐます多分紙數を殖やして書く方面を豐かにすることを意味してゐるのでせう。實質時代云々もさう第二期だの第三期だのといふ程のけじめはありません　私は川柳雜誌を三十年計劃でかゝつてゐるのです。（經濟的確立、量的の發展　文壇への水平運動　質的完成といふやうに考へてゐます。勿論質の問題を外にしての話ではありませぬ）だから未だ〳〵ほんの初期だと觀て下されば間違ひありません。しかしあなたの云はれる個色的な作家を自由に伸ばすといふことは今更の問題ではないので微力の及ぶ範圍で力をつくしてゐます。それは同人の誰彼の句を御覽になればおわかりになるだらうと思ひます。

一體革新の名によつて奮鬪？をしてゐる人達は氣短過ぎる共通性の缺點を持つてゐると思ひます。薄つぺらな雜誌すら出たり出なんだりで社會から川柳に對する從來の誤解を一掃しやうなぞと考へて見ることすらあまりに虫のいい話だと思ひます。これは失禮な言ひ方かも知れないが私はいつもさう思つてゐますので正直に書いてしまひます。

エスペラントだつて今日の狀態まで漕ぎつけるのに幾年の歲月と幾人の犧牲者を出したかを考へて見れば、さうとつくり早く革新の實は擧げ惡いでせう　人間は自分で穴を掘つて　そのどころへ嵌まり込むと仲々うごきが取れないものです。

そこに傳統派の墮落があり　革新派の惱みがあるのではないでせうか　私達はもう少し辛棒強いことを心がけやうではありませんか。（**ある日の手紙をみて**）



川柳塔

○　關本雅幽

職業を奪はれて來て鳩と居る
醫者の手で殺したように女親
門衛は張作霖の肩を持ち
岩に腰掛けて誓つた仲なりし
この寒さ絹の薄さを知つたかい
懐手紅提灯がおぎつてる
戀一つ守り通して日本に居
負けぬ氣の簞笥の鍵に手をかける
面當のように熟柿は石へ落ち
愚痴聞いて呉れぬお客はいんでくれ

○　森田輝翠

話せない主人だと知る金の事
みの親それとはなしに覗きに來
世の中をさんざ嗤つて主義者死に
突退ける樣に中賣肱を張り
親切も通り越しては地味になり

○　黑木莢豆

甘まかつたあとの皿とは見えぬなり
妹もおんなじ氏と氣づく朝
ゐらひ人へ這ひつくばつたそてつ也
盗癖を知つたころには孕んでゐ
たぶらかす方がかしこい顔になり
灰色にたてこんでくる年の暮

うるさいので欺された顔になり
裏切つた女の腹のふくれけり
尼さんをさびしがらせる漫珠沙華

○　吉川　啞人

獨酌に未だ氣の折れぬ母があり
疑へば限りがないと呑んで差し
足弟と見たは流石に藝者也
借物のやうに結ひ立て大事がり
女房から若いと云ふは苦言也
水面へ待ちぼけ寒う寒う立ち

○　林田　馬行

十二月女房しきりに水を撒き
話し合ふと案外左傾してる僕
瀬戸火鉢今日も僕のを編んでるる
年の暮俺も大分すさんだな
さうかいと云ひ〳〵母の洗ひ物
履歴書の嵩に悲觀をして歸り
美少年そも立身の初めにて
五十錢そこにも時の流れあり
才あつて花火に似たる死を撰び
犬飼へば犬の事にて暮れ易し
眼醒しへぐつと生きたる腕が伸び

○　庄　万よし

高利貸病氣を押して取りに來る
夜店ふとみんな賣れたらなと思ひ
帳場へも隱して老舗賣ること決め
それ〳〵お前のその眼が氣に入らず
べちやんこの籠じこほろぎ死んでるる

○　西垣　松雨

土地會社もう橋が出來家が出來
これ〳〵を荷ふ鉢卷宙を飛び
瓶の外それでも鼻をあてゝ見る

○　德田　双柳

遺言に妾の分としておけず
落ちそうな櫛を敎へたはずかしさ

年頭の句

新年の疑ふ程にあらたまり
月給も相變らずであつはつは
重役と言葉換はすも松の内

○　岩崎　柳路

君のワイフのヒスには僕も困つたよ
大根のやうな白さも女なり
鮮人と知らず私は惚れました
置き去りをされて近所の世話になり

幸福は綺麗な白髪賞められる

○　太田　一聲

道聞けばあこへ〳〵こ教へられ
注連縄の下をくゞつて無理な願

皇孫御降誕を祝して

來る年を待たず榮ゆる日御孫

○　麻生　霞乃

囀りが籠にこぼるゝばかりなり
張り替へた障子にばかり春が立ち
頑丈に生れ一兵卒こなり
櫻　漬　山々霞むかこ覺え
工夫等こ別の世界で雲雀鳴き

○　三好　革郎

資本家の考へて置く意味を知り
新しい足袋一足に禮を言ひ
集めても集めてもまだ足らぬなり
一合の酒の御利益知り過ぎる
猫捨てゝ默つて二人向ひ合ひ

○　塚崎　松郎

天才は自炊に馴れて今日も出ず
曲藝は懷手から思ひつき
出戻つて來て母親こ並んで寢
張作霖大三十日程困るなり
ごうせこうなるものこ後家ひこりきめ
二越から戻つて妾ぐにやこなり
許嫁なたねの膳に坐らされ
生醉の女ばかりこ見てこつて
歩を一つ頭へ打つて喫ひつける
結婚後矢つ張り兄の厚司掛
腐つても親だふこ母ちこ怒り
貰つては貯めて丁稚の二十一

十郎の死

くやみ云ふ五郎目はぢきつゞくなり

○　橋本　二柳子

恐しい事を板圍へ聞かすなり
帆なごおろして港の夜こなり
兩眼がまぶしくもある父の意見
モーターの樣に働けこは無理だ
春らしい氣持になつて遊びやす
醜さは女の聲のおほきいここ
樂しみに落葉を拾ふ暮し向き
幸福を幸福こせず怠けてゐ
親ゆづりたゞ金使ふだけに生き

柳樽通釋「異見の異見」を讀みて

西原柳雨

盆踊もうちつこのが音頭取

普通の文體から云へば音頭取こ云へば音頭を取る人に極つてゐれごも不切言を常體こせる川柳では音頭を取る動作こも解せらるゝが茲では名詞こしても動詞こしても意味の上には殆んご變化はない樣に思ふ。音頭取は少くこも其連中での先輩或は老熟家でなければ勤まらぬ筈なれば十三四歳の小娘こ云ふ原解には固より服することは出來ぬ、もうちつこのがのゝがはもうちつこである人がの意なるべければ東魚兄のあぶな繪的解說にも贊同しかねる半文錢兄の粗雜な櫓で音頭を取つてゐるこの解には全然不贊成であるが老人說には幾分か贊意を表するも併しながらもう棺桶に片足を突込んでゐる老人こしては聊か不自然の感がある、結局四說共に首肯し兼ねる、こ云つて自分にも矢張り駄弊解の外に名說はない、只『盆踊子をしよつたのが頭分（寶曆）』盆唄は首二つのが音頭取（明和）等の句より類推して此句を年增の乳母こでもしたらごうであらうかこ思ふ。も內つこは今暫くにて交代する女に「秋の出代りを暗示したるもので はなきか歳時記には春の出代りを二月二日、後の出代りを八月二日こしてあれごも後は二月こ七月この十六日に成つた樣である、つまり私の解は出代り前の乳母なごが音頭取をやつてゐるこの意である。

頂いて飲むちくやしき山歸來

東魚兄は放蕩をした男自身こし半文錢氏は友人の慈悲で藥をのませて貰う 其で頂くの文字が活きるこ云ふお說孰れも贊同し兼る是は山椒氏の原解に同意したい、頂いて飲むこは藥は飲む前に頂くこ云ふ慣習であつたのであるから男でも女でも差支はなければ女こした方がうつりがよい亭主の爲に山歸來を飲むの

は口惜しいが藥は藥である冥目一禮ぐつと飲んだとした方が寧ろ面白いと思ふのである。

尺八に胸のおごろくあら世帶

原解の『若し今のを見れはしなかつた』云々は無論不贊成東魚兄の說に擧げてないから不明。半文錢兄の二人が顏を見合はして醜行を弄づる狀態と云ふとのお說亦腑に落ちぬ是は虛無僧と成て女敵を探がすと云ふ句にて奸夫奸婦が手に手を取つて他國に隱れてゐる所へ表へ尺八の音がするのでもし本夫ではあるまいかと胸を轟かすと云ふのであらうかう云ふ句は別に甲窟や錯字などの上から論じても仕方がない私の兼ねての持論の通り類句推解の外はあるまいと思ふ女敵打の尺八を五六本參考の爲に附記しておく『新世帶同じ虛無僧二日來る（天明）』『虛無僧は屋越車に氣をつける（安永）』『尺八をひげむくじやらな男買ひ『天明）』『あのあばたでは尤も一月寺（天明）』『先の亭主に御無用と運のつき（天明）』『新世帶門に虛無僧手をつくし（安永）』なぞ未だいくらもある。

同　竹馬居主人

○

一篇通釋を注文せしなれど未着　原本を見ないので物足らぬが　十一月號東魚氏十二月半文錢氏のお說丈けを拜讀して、いらざる差出口を申す。

★ほんおごり最うちつとのがおんぞ取

私は山椒氏說贊成者である　半文錢氏は盆踊を笛太鼓で異樣な姿に雪踏で調子を取つたりする地方の踊を頭に描いて居らるゝ樣に察せられるが　江戸の盆踊りは全然相違して居るので古書に　十ばかりより六ッ位迄の小供をさきに列べ　十二才より十四五才の娘は其々ぎに一ならびとなり、其あとだちこいふものは子守の小女郎、十五六より十七八迄五六人立ならび、お乳母ごのを軍師と賴み前後に備を配りて隊伍整々とくり出すとある之れに依つても半文錢氏の第一第二說共成立せぬ。

盆踊是非なく乳母も地を唄ひ　（明和）

で音頭取は大人でない事がわかる。

盆唄は音二つのが音頭とり　（寶曆）

盆踊子を背負つたのが頭分

此類句から推考して東魚氏說には服し難い、尤も其の娘が十三四であるか十五六であるか、そこは各自に決めやう。

★尺八にむねのおごろくあら世帶

私は半文錢氏說に不贊成者である、此種の句は最近『鯱鉾』誌上で研究濟になつて居るつもりである。

曹化禪師の末門に入つて探し
で敵討には虚無僧になつたもの
ねめ廻しうなづいて行く新世帶
は尺八を吹く方の側を詠じたので　對照され度い。
先の亭主に御無用ミ運のつき
最早疑ひもなく女敵討である、虚無僧の句一二、
御無用の聲が敵にそのまんま
御無用を氣味わるくいふ　敵持
口惜しさ似た顔も見ず吹き歩き
★いたゞいてのむもくやしき山歸來★

東魚氏半文錢氏兩説面白し、自分が以前から抱いて居た解を恥さらしに記せば『いただいて』は優しい言葉で普通女子が用ひる、『くやしき』は上五から關聯して、女性的のくやしさ（愚痴嫉妬、恨み等等を含む）で
まきぞへにあつて女房の山歸來
亭主から傳染はしたが、ヤハリ夫に對する愛情はある（其間に愚痴や嫉妬のイキサツが纏綿する）只アノ腐り女郎が恨めしい腹立たしさ）之等綜合された感情が中七にこめられ、山歸來を頂いて服むのがくやしいのである、結局は山椒氏説に還元せられる、

笠森へ女房佛頂面で行き
惡性では山歸來の上に信心も必要か『頂いて』ミ云ふ上五を用ひた句に
いたゞいて受けべき菓子を手づまにし
（十一月二十五日記）

この稿着後下記の通信に接す（編者）送稿せし「異見の異見を讀む」の中「ばんをごり」の句解として私が引用した浮世風呂は本日二篇通釋が着本して見れば同じものが引用されてゐます、因つて私のは省略して頂きましよう、然し取消したのでは其句の解がポツチぎれになりますから前後御加筆下さい。而して「盆踊」の句に對する私見には更にかわりなく半文錢氏の解はあやまりと思ふ、此の二篇の通釋を讀まれて尙且つ半文錢氏の疑問は私の不思議とする處です、私の原稿は只此の浮世風呂の文句だけ拔いて、江戸の盆踊と地方のとは全く相異せる旨を明瞭にして置いて下さいませ（省二）

田中五呂八氏編著
新興川柳詩集

（イロハ順）
井上劍花坊氏序　川上日車氏序
古屋夢村氏序　白石維想樓氏序
島田雅樂王氏序　森田一二氏序

■川柳革新派の第一期詩集■人間が人間として持つべき川柳
■川柳未來主義を暗示する諸相■現柳壇を先驅する生命短詩
■日本短詩壇を横斷する個性詩■新興川柳四年間の精粹八百餘句

二百五十頁
定價　壹圓參拾錢
送料　八錢
四六版・洋裝

小樽市稻穗町東一ノ七
發行所
川柳氷原社

漫畫

虎々漫談

吉岡鳥平

（一）

『僕は新年になると妙な因縁でね一昨年は忙がしくつて鼠のやうに飛び廻されたが去年はサッパリ用が無くて牛のやうに食つちや寢てばかり居たよ』

『面白いね、そんなら今年は寅年だから、新年早々大に酒を呑んで虎になつたかい』

『なにさ、トラホームに患つた』

一〇

川柳は詩界のパツクである

坪内逍遙

歌舞伎が劇の化け物である如く、川柳は詩の化け物である。あんな簡單な形式で、音の數がたつた十七だけで、あれほど、自在に通俗に　おまけに皮肉なをかしみまでも持たせて、複雜な人生の、時こしては含蓄の深い機微を詠じ得た詩が又こ外國のごこの文學にあつたらういや單に詠じたこいふよりは、叙して批判し描いて諷刺した斯んな詩が　又こ現在のごこにあるか？又こ過去のごこにあつたか？ギリシャ、ローマの昔に榮ゑて近世の英、佛、伊、獨等へ傳はつたエピグラムこいふものが、おそらく唯一の親類筋でもあらうが　それこても本が碑銘から進化したものだから、ある嚴肅味が後世のそれにまで遺傳して、皮肉な譏刺脈だけは似てゐても、私の知つた限りでは、

（二）

『十一月の二十二日に道修町の藥の神様で授ける張子の虎な。是が病氣除けになるこ思つたら大變な間違ひだぞ』

『ごうしてだい』

『考へても見ろ、あの張子の虎で病氣を防げたら藥屋はごうなる　飯の食ひ上げぢやないかして見れば藥の神様こ藥屋こは倶に天を戴がざるの商賣讐の筈だ所が道修町の藥屋は盛大に藥の神様を祀つて居るんだ眉に唾をつけてよく考へて見ろよヘッヘッヘ

到底川柳のやうに多趣多様ではなく、平民的でもなく、洒落でもなく　簡約でもなく、卑近でない。また決して川柳のやうに目前の世相を主こするものでないのだから、社會史料、民俗史料こしての役には立たない。

私は川柳の卑近こ奇警こ皮肉なをかしみこを思ふたびに、イギリス中世傳説の小妖精ロビン、グッドフエロウを憶ひ出す。それは『眞夏の夜の夢』で活躍するパックの別名なのであるが、拵が小さくて、すばしこくて、陽氣でさうしていたづらで、ちやうどわが河太郎そつくりこいふべき茶目振が、さながらに川柳の象徴だこも思はれる。で、私は謂ふ、川柳は詩界のパックであるこ。

いや、骨を刺し肉をゑぐる川柳の寸鐵は、ある時は鍼の用をなして惡德こ癡蒙を規戒し、ある時は鍵の働きをして時代世相の秘微を開く。近頃寸劇こいふ科語が出來たが、川柳は文字通りに寸的叙事

詩であり　寸的諷刺詩であり、寸的劇詩である　譬へていへば、バッと撥ねる鑛火の光りでダイヤのやうに多角的な世相と人事とを瞥見させる、それが川柳の特技である　こんな簡約な人事詩は古往今來、又とここの國にもなかつた（川柳江戸歌舞伎序文の一節）

▲柳樽通釋二篇素讀

（三十五頁の續き）

幸堂先生は『前後の繩張』と云ふ樣に申されたと記憶する。

（一〇八）金持を鶯といふ音羽町

三面子博士のお說が記されだから金持の異名との事、丁度同じような意見が十世翁にあつた、音羽町は遊女屋のありし所、藪屋敷交りの土地なり、鶯は金衣鳥と申せばよき衣着た客を、鶯と言ひしなるべし、加ふるに音羽の名鶯に因あればならむと。

鶯は黃鳥

終りに臨み著者に敬意を表し、尙十數句異見を有し居るも、餘り長くなるので夫れは他の誌上貴意を得る事に致します。（十二月三日稿）

川柳机鳥露丸三評刷物

岡田三面子

昨大正十四年十月中、大大阪の本田溪花坊氏より借覽した萬句合は、殆ど全部、これ迄に例のない程の好參考資料であつた、が特に其中の一枚板行で

西二月七日開き

惣連五百六十一口

春樂三評　川柳　飯田町中坂

机鳥　錦組連

露丸

といふ連中の選句集、前句は目出度かりけり〳〵

○そい〳〵なこと〳〵

▲われも〳〵こと〳〵

×格別なこと〳〵

■能いかげんなり〳〵

の五句、それに川柳評十一口、机鳥評十一口、露丸評十一口合計三十三口載つて居るのは、左の四點に於て限り無き感興を催した。

一　机鳥は柳樽四編に跋を書き、又十八編の序東都前句萬句合判者連名の中にも其名あり、これまで多少注意はして居たが川柳と合評をする程の間柄であつた事は、右

の刷物で初めて知つた跋は餘りよく出來ては居ないが、活字本柳樽全集を初め、それの缺けて居るのが多いから、全文を轉載する。

佐禮柳子の旨とするは所謂句言虛にして句意誠情に叶ふ古語事ともに專姿情也是當時まへ句の吐風ならん歟其外六義にもるゝこゝなくきよらかにゞしてやなき樽と號吟中の花なるは聟嫁の祝名にしてたへすさ九良木に實をむすぶなかたちは吳陵軒のあるしの樽毎に淸書して校合既にこゝのひぬ發趣は篇々の序にくはしければ爰にもらして其仕あげ跋する者東府西舍居李鱗齋机鳥愚手をにしりて呑口の封印する事爾也印

右机鳥單獨評の萬句の刷物は、不幸にして今日までまだ一度も出會したことがない

二　露丸は白花堂こいひ、十八編判者連名にも見に、その單獨評萬句合の刷物は、原板及び寫本合計二十一枚手元にあり、その選評ぶりが、いかにも川柳に似て居るから柳書刊行會發行柳樽研究月號へ、特に露丸の事を寄稿して置いた。

三　川柳の前句附萬句合の開きは　毎年八月五日を初會に、五の日〳〵を月三回と定めてあり　それより前例外として、明和六丑年に市谷田町初瀨連の句を、正月乃至七月毎五の日に開卷し、その大部分は柳樽六編に拔載せられ、且小生が其全文を大正川柳一二八號（大一二年三月一五日發行）に載せ　自分所持の分では、それが組連句選集の最も古いのであると附記して置いた。然るに前記春樂三評の酉年は多分明和二年の酉なるべく　若しさうであれば、初瀨連のより四年以前のものとなる。

四　初代川柳が　他の判者と合評をした卷は、右の外には小生まだ見たことがない、此點特に面白く感ず。

一本の足（X生）

▲Aは彼の仕事にホッとすると椅子によりかかつて窓から往來を見おろします。別に何を見やうとしてゐるわけでもありませんが、それでも時々妙なものを發見して一人で苦笑してゐます。

▲お芽出たう

本年も相變らず御後援御愛讀をお願ひいたします

麻生葭郎
麻生葭乃

▲ある日のこと　例によつて窓から外を眺めてゐますと電車道の向ふ側の人道を一人の女がすた〳〵と歩いてゐるのです。その足並が實に機械的で僅かに一尺あまりの幅を一歩一歩向ふへ〳〵と運んでゆくのです。あんな歩き方をしてゐて何時目的地へ達するかと思ふ位なのですが、そんなことをAが考へてゐる間に女は彼の眼界から全く去つてしまつたのです。そしてこの男はその時にはじめて一歩々々機械的に歩く怖ろしさといふことを知つたのです。

匂ひに關する川柳會

十一月八日午後一時より
於船場ビルヂング

新裝成つた船場ビルヂング内に開催されてゐる「匂ひに關する展覽會」主催、本社後援のもとに、十一月八日午後一時より同所四階に於て句會を催しました。左の熱心な出席者に依つて愉快に作句し午後六時散會致しました。

路郎、水府、溪花坊、紋太、馬行、刀三、一路、松郎、屏三呂、幽里、南双、三次、半三郎、三平、双柳、越浪、かほる、柳水、南枝、みのる、飯山、夢遊、悟郎、彩秋、塊佛、乾坤、ひろし、蔦歩、萬よし、革郎、聞路、のぼる、二柳子

香水（兼題）　路郎選

働いてゐるのゝ香水匂ふのゝ　花泉
香水に關係のない共稼き　のぼる
香水も混つた匂ひさせてゐる　逸錢
束の間の匂ひ床屋はさせて呉れ　其象
二三滴帽子へくれる許嫁　幽里
ちゝ派手な柄に香水まだ薫り　三平
香水なぐつけて萬引あきれさせ　聞路
停車場へ來て香水を思ひ出し　双柳
香水の夜具に疲れをちゝ覺ゑ　ひろし
出戻りの眼に香水の悲しかり　松郎
オールバツクポケツトに香水もる　二柳子
珍客へ寢間香水は嫁の智慧　飯山
持主は知れず香水匂ふだけ　蔦歩
香水へ折目の付かぬ札を出し　刀三
香水のこれつぱかりを恩にきせ　塊佛
零落へ香水過去のまゝ匂ひ　屏三呂
香水の息を嗅いでる潤一郎　革郎
香水たのに疑ふて逃げて行き　紋太
香水のつめの雫を見のがさず　水府
意見する父へ香水ふんこくる　乾坤
見て貰ふ兄に香水少し減り　同
香水へ僕も僕もと帽を脱ぎ　馬行
戀人の手から一滴匂はせる　同
まじないのやうに香水振ゝ出る　夢遊
女事務今日は香水つけ忘れ　同
都から歸り香水匂はせる　同
帶解いた裝りも香水引立たせ　溪花坊
香水にあぐけなき裾蹴へし　同
香水の搖るゝが如く匂ふて來　同
（軸）兄さんの香水半分盜まれる　路郎

支那街　水府選

支那街を横目も振らず通り過ぎ　悟郎
支那街を歩く毛唐の脊が高し　一路
支那街を去ぬ車屋の高笑ひ　松郎
支那街へ尾行をまいて這入り　ひろし
支那街で見逃へられた日本人　馬行
支那街へ漢字ばかりの荷が着き　刀三
支那街で醉ふた支那人見て歸り　夢遊
支那街の匂ひに馴れて通になり　革郎
支那街の勝手も知つた姉御なり　塊佛
支那街に小さい足が減つて行き　三次
賣出しのやうに支那街ブラ下げる　蔦歩
支那街の八百屋に目立つ赤い軸　万よし
支那街の日向に煙草喫ふ男　紋太
支那街は一月遲く春に成り　飯山
犯罪へ支那街の夜はまだ明けず　乾坤
支那街へ入つた事件はまだ迷ひ　屏三呂
支那街の秘密を包むやうに暮れ　同
（佳）支那街は關係の旗を立て　刀三
（佳）支那街は國旗の色で隔てられ　溪花坊
（佳）勿体ないやうに支那街陽が當り　乾坤
（佳）支那街はお伽噺のやうに更け　塊佛
（佳）寒さは寒し支那街の豚の鼻　路郎
（人）四ツ辻來て支那街の夜を知り　南枝
（地）支那街に親の分る子が一人　溪花坊
（天）支那街の人だかりに犬か逃げ　紋太

水　仙　　溪花坊選

活けられた水仙籔をのがれてゐ　屏三呂
水仙の根水盤に沈んでゐ　二柳子
水仙は水に曲つた角を咲き　万よし
水仙はうつむいてゐて出がちなり　水府
山茶花の側で水仙斜に咲き　幽里
さしかへた水仙の花少し濡れ　三平
水仙から水仙へ水流れて居　ひろし
窓の風水仙の位置變へさせる　乾坤
ウキンドーの水仙すこし萎び　夢遊
水仙は不幸續きの中に咲き　刀三
水仙の咲いて小鉢にうつされる　獨眼坊
水仙の影が動いて硯箱　松郎
襟卷をして水仙を賣りに來る　飯山
水仙がはつきり咲いて年が暮れ　紋太
水仙にまだ一疋の蠅がゐる　同

艾　紋太選

母親は艾のありか知つてゐる　聞路
姑へ艾をちさく〳〵もみ　飯山
姑へ艾やうやく出來上り　南枝
もう艾笑つて子供逃もせず　屏三呂
艾今日きたいな指につまゝれる　かほる
皺にした袋の艾役に立ち　水府
二四か八艾次々煙を立て　馬行
泣き止んで艾は元の小抽斗　路郎
艾の火これから熱い色になり　塊佛
つけてから大きすぎたと知る艾　同
姑の暇は艾の蒿をみる　刀三
おなごしと留守して艾匂はせる　同
（軸）話するうちに艾が大きすぎ　紋太

糠味噌　松郎選

糠味噌へ女房生挿る氣味があり　乾坤
糠味噌の桶が並ぶも舊家なり　万よし
糠味噌を洗ひ落さすに灯がともり　かほる
糠味噌へ意地の男の手がはいり　屏三呂
糠味噌のさぐり當てたる顔になり　馬行
糠味噌の匂ひ躊躇する亭主　溪花坊
糠味噌の揉め臺所だけのこと　紋太
糠味噌を母は冷たい顔もせず　悟郎
糠味噌を見なから洗ふ泊り客　水府
（人）御寮人糠味噌へまた氣を配り　路郎
（地）糠味噌のあたりに寒い風　刀三
（天）糠味噌を洗ひ落せば女の手　水府
（軸）糠味噌へまた小姑の口が過ぎ　松郎

ペンキ　馬行選

ペンキ塗り匂ふばかりで儲かる　刀三
忘れたにあらずペンキ屋今日も來る　水府
一儲けしたペンキ屋に灯がともり　三平
一歩誤まればペンキ師河へ落ち　松郎
塗れるだけ塗つてペンキ屋畫にする　双柳
このペンキはげまつしやろ長い爪　蔦歩
集金に來たペンキ屋の別な顔　一路
用心をしてゐてペンキかしつき　夢遊
圓く見たものをペンキ屋圓う描き　溪花坊
まだペンキひゝさうなドアをあり　紋太
もう一度呼びに來られるペンキ塗　路郎
おついでになごゝペンキ屋塗られ　同
（佳）ペンキ塗り各所に近驛出來　刀三
（佳）落書を笑ひペンキ屋塗替る　獨眼坊
（佳）十二時を聞いペンキ屋土を踏る　三平
（佳）金槌の音に乾いてゆくペンキ　松郎
（佳）ペンキ屋に何か教はるやうに立ち　水府
（軸）そのペンキ知るも知らぬ立話　馬行

杉　箸　　互選

杉箸を大事に使ふ女房なり　塊佛
杉箸へ江戸者喋り續けなり　万よし
代表者杉箸置いて改まり　南枝
すき燒に出す杉箸はありあまり　双柳
杉箸の土産に勢から戻つて來　二柳子
杉箸を妙氣なく渡す出前持　三平
ほろ酔のまた杉箸をしがむ癖　屏三呂
杉箸を土産に貰ひ持し餘し　越郎
抽斗へ杉箸輕い音を立て　南枝
ぶゝ漬になつて杉箸色を變へ　かほる
杉箸の割られて生地の色を見せ　同

杉箸に旅の話を添えて出し　乾坤
杉箸へ力餘つた今朝の膳　同
花嫁のうわさ杉箸よく動き　一路
遠慮した客へ杉箸ころげ落ち　同
ごぢや〳〵になつて杉箸桶に浮き　夢遊
杉箸がそのまゝ殘る出前箱　同
貧しさの中に杉箸春になり　飯山
杉箸へ人蔘の色寒く見え　同
杉箸の丈揃へるも女なり　ひろし
御寮人杉箸くばるだけの用　同
洗ひ流せば杉箸は突つ立てり　溪花坊
杉箸が輕くバケツに浮いてゐる　同
烙印を仰向けておく杉楊枝　水府
杉箸を雫のまゝの一握り　同
杉箸はきつちり人を座らせる　路郎
杉箸で一つ遁れる隱し藝　同
杉箸を煮豆謀叛の氣で辷り　柳水
杉箸はさら〳〵さつと洗はれず　同
末の子にちと杉箸の大きすぎ　同
杉箸に煙が立つて餅が燒け　刀三
杉箸へ輕い悠氣は垢がつき　同
杉箸を嚙むと不思議な味がする　同
杉箸の遂に屆いた紅生姜　馬行
杉箸を遙に越した鮨の嵩　同
杉箸を手に見しるるとよく賣れる　同
杉箸へ高く盛られた花がつを　松郎
杉箸を前に冷たい手を重ね　同
杉箸に木の芽はついてあがるなり　同

人いきれ　互選

人いきれ露臺に出れば二三人　獨眼坊
人いきれ逃れて知つた身の弱さ　革郎
人いきれむさぼるやうに嗅いでゐる　馬行
人いきれこのかを揉んでやつと拔け　屏三呂
人いきれ下は電車のきしる音　一路
人いきれ子の可愛さが身にしる　万よし
ぐつたりと脊の子は寢てゐる人いき　越浪
人いきれそれから續く屋臺店　幽里
人いきれのまゝやうやくと國へ着き　三平
人いきれにごつせうかと立上り　二柳子
人いきれぢつかで子供泣いてゐる　悟郎
樂隊が遙か聞へて押され合ひ　柳水
人いきれそれた横町で呼ばれ居　ひろし
人いきれ横町からの風があり　飯山
人いきれちと演說が長すぎる　同
人いきれ頭ばかりの續くこと　塊佛
買物をすました顏へ人いきれ　同
あれ以來一年經つて人いきれ　刀三
人いきれ妹が先づ里心　同
人いきれ話相手もなく眺め　紋太
人いきれ入る可からざる棚に摺れ　溪花坊
人いきれ稚兒の冠だけを見る　同
人いきれ○對○がまだ續き　水府
辨士の名だけの明りに人いきれ　同
人いきれ目くばせをする人に逢ひ　路郎
初戀は人いきれにも醉ふてゐる　同
人いきれそこへ女の立上り　松郎
人いきれかゝるところへ窓がある　同

同人小集會

十二月十一日夜　輝翠居にて

生魂神社のほとり、輝翠君の新居に小集を催す。忘年句會の事や、記念句會などの相談やらで賑ふ。

眞綿の句　案中のそ〳〵と大きな飼犬が下から上つて來てみんなにお馴染になる。たま〳〵醫藝分業の願書から、香具師の藥本賣りの物眞似をやるものがあつて散會（二柳子）

眞綿

けふ一日孫に眞綿を貸してやり　路郎
云ふ事を聞かぬ眞綿の端しと端　かほる
秀才は眞綿のチョッキからかはれ　万よし
ついて行く眞綿襖に殘される　月兎
紐解けば眞綿は元の嵩になり　輝翠
串柿と眞綿が着いた十一月　松雨
綿入をみんな眞綿にする暮らし　二柳子
留守番と云ふは眞綿を負ふた人　馬行
いかさまのやうに眞綿は盛り上り　松郎

私見二つ

林田馬行

最近川柳を初められた人からいろんな質問を受ける　もとより若輩である僕が是に對して滿足なる答へを與へる事は至難であるが、初心者の始終思つてゐるらしい事で　僕も最近感じた事柄を一二述べて見たい。

△五七五とリズム▽

川柳句作上に於て、五七五の調子は我々の耳に快い感じを與へる然し時として、もこの律格を守り得ない　想にぶつゝかる事もよく有り勝ちである。かゝる場合　想を殺してまで五七五にまとめる必要は更々ないのである　内容にふさはしい作者獨特のリズムを以て詠んで頂けばよい、よし無理をしてこの律格を守り得たとしても、そこに何等川柳詩としての生命がみとめられなかつたら　それは所詮徒勞であるからである。然し現在句會なり又は雜誌の募集吟から察するに、字餘り字足らずの句の多くは　ていにをはを無視した初心者の句である事である　是は最も心すべき事で、かゝる字餘り字足らずに對しては一考を煩したい　只初心者の人々の頭に、川柳とは五七五の者だと云ふ　絶體的な頑冥なる觀念の先入主となる事を恐れたまでである　是は既に解り切つた事であり　僕の單なる杞憂にすぎないかも知れないが最近一寸感じた事があるからだ。五七五の律格は破つてゐても　決してリズムを無視してゐない先輩の作品を列記して參考に供する。

頭から氷が落ちて死にけり　柳珍堂
屑籠屑籠また轉任だとさ　日車
二人よれば二人きりのはなし　紫白
飯の種さがしに出たが噴水　路郎
おごりた心よ麥酒の泡よ　同

△技巧▽

先日或る新しい人から　無技巧川柳に就ての御高説を承はつたが、私は藝術は凡て技巧だと云ひたい。この場合この技巧と云ふ言葉が非常に不穩當のやうに聞ゆるかも知れないが　川柳に於て、句にまとめると云、それ自體が　すでに技巧より出發した言葉であるからだ。

もとより不自然な技巧は排さなければならないけれども、藝術を生むに當つてはそれにふさはしい自然の技巧を必要とするからだ。かの無技巧を提唱する碧一派の俳句に於てさへ尚絶體的の無技巧俳句ではあり得ないと思ふ

この人の無技巧川柳論も全然技巧を無視しての意見ではなかつたやうでもあるが、技巧と云ふ言葉がよく用ひられるこのごろ、一寸私見を述べたまでだ。

句作上の常套語（七）

麻生路郎

（12）「いひ」て止めた句

從來の所謂川柳らしい川柳の姿こ云へば『なり』で止めた句『る』で止めた句、『る』で止めた句『いひ』で止めた句、等々々で止めた句だといふことが出來やう。それほど『いひ』は句作上常套的に用ひられてゐる用語である。

しかし　あまりに常套的に用ひられた結果、何でもかでも『いひ』で止めたといふやうな句の多いことは甚だ遺憾である。『いひ』で止めた句の上こ中こは、主としてその句中に描き出された人物の言葉をかりてゐる場合が多い。

―昔の句―

死にやは死にやなぎいこはぐ母はいひ

（評）この一句を讀了した時に私達のあたまに來るものは生みの母の愛である。次に、この娘には既に意中の男があるといふことである。「あればかり男かと母邪慳なり」といふ句もある。

鶏があくびをしたこ聾いひ

（評）同じく滑稽でもこの句には涙がある。川柳は決して駄洒落で終始してゐないことがわからう。

病み上り喰はせずにおく樣に言ひ

（評）「飯櫃へ追手のかゝる病上り」といふ句さへある。病後の貪慾、それは誰れしも經驗するところであらう。

くどかれて娘は猫にものをいひ

（評）光景躍如、この頃の娘さんは果して猫にものをいふかだうだか。

番頭の末期に子あるこをいひ

（評）あの眞面目な番頭さんに、眞逆隱し子があらうとは驚くやうではまだ〳〵世間を知らぬといふもの。

―今の句―

呑んで呑んで呑み明かさうこ無理を云ひ　雅幽

せぬ帶へ母さ〳〵んの愚痴を云ひ　零骨

犬か吠ねましたやらうこ妾云ひ　徹郎

又痴遊此の大臣も悪く云ひ　眠聲

紺絣女中にまでも禮を云ひ　二柳子

年寄の子だけにませた事を云ひ　寸馬

弱かつたあたしを責めて呉れこ云ひ　馬行

新店はそれもすぐ來るやうに云ひ　路郎

（13）「過ぎ」て止めた句

私が曾て別府へ行つた時「龜の井」といふ旅館に案内された

ことがある　その頃に出來た句に聞いて來た宿屋さんまり大き過ぎ

といふのがある

あまり名句だこは思はぬが、旅をするものに取つては豫想を裏切られることは何れにしても興趣の深いものである。『過ぎ』は　そのものをより過大又は　より過小にする場合に用ひられてゐる。

―昔　の　句―

腹立つて出る傘の開きぎ

（評）寫生の句でもあり、穿ちの句でもある。からかさが　開きすぎることは何んとなく滑稽に感じさせるものである。

出代の涙にしてよこぼしすぎ

（評）人情の機微を穿つた句である。出代りの女が、別れを惜しむ涙としては、こぼしすぎた、これには何か理由がなければならぬ。若旦那とのふしだらの發覺か？、主人との密通か？それは兎に角「外聞の惡さ女房と下女が論」といふ句がある。

貰乳に代る砧の力過ぎ

（評）「何んの遠慮か要りませう、妾の方は乳が張り過ぎてゐるんですから」と氣やすく云はれゝば云はれるほど氣兼ねをせればならぬ貰ひ乳ほど氣の毒なものはない。「では、お手をとめて濟みませんから」と砧に代つた男親の砧打つ音が冴ゑてくる。

―今　の　句―

極道へ姉の言葉の優しすぎ　松郎

一筋にみゝずの聲の悲しすぎ　莢豆

看護婦に貰つた水の少なすぎ　駒人

藝なしの番に殘者の口が過ぎ　紋太

（14）「思ひ」て止めた句

『思ひ』で止めた句は『いひ』で止めた句ほどにはない。『思ひ』で止めた句の半數までは矛盾から來た滑稽の句であり穿ちの句である。

―昔　の　句―

あいさうのよいを惚れられたこ思ひ

（評）若い女からあいそよく云はれると、てつきり夫れと早合點する男が、其處らにウヨ〳〵しくゐるかと思ふと、お可笑しなる。自分もその一人だと思ふと苦笑せずにはゐられぬ。

平つたくこひ出せかしこ後家思ひ

（評）惚れてゐるのなら、あつさり惚れてゐると云ひ出して奥れたらいゝのに、決して恥をかいたりはしないのに、ゐもどかしい……男のくせにどうしてはつきりと口が利けないんだらう。こうした思ひが若い後家のあたまの中をかすめて行くことは必ずしも無理からぬ事かも知れぬ。

是ではごうも　では　賀思ひ

（評）朝は朝で早くから起され奉公人に立ち交じつての活動、夜は夜で女房の御機嫌とりか。小糠三合を嘲つた句。「外聞の能い奉公と賀思ひ」といふ句もある。

―今　の　句―

看病はまたかステーラかこ思ひ　かはる

ほんに長旅だなこ雲思ひ　莢豆

墓守も河がな辭世をこ思ひ　日車

逢ひ宿替へしたいなこ思ひ　聞路

萬引を亭主へそ縁りかこ思ひ　松雨

人妻の手柄ゝ思ひ眼を思ひ　路郎

「云ひ」でも『過ぎ』でも『思ひ』でも平凡な句となり易い。初心者の尤も作り易い句であつて、佳句を得難い常套語である

（つゞく）

『懷手』時代

三好革郎

麻生先生

毎年正月になるとあの懷手時代を思ひ出して仕方がないのです。彼の時代のことを思ふと、先生も大分御年を召しましたね　私も當年の元氣は浮世の波で大分洗ひ流され。日本海に突出して居る岩のやうに年と共に摺り減らされてゝひました

『商業之大日本一こそ懷手の產婆だつたのです　柴谷柴舟君を先生に御紹介した時代の私は隨分亂暴でしたね　女の鼻を吹いて歩くのを得意の藝にして居ましたね、思ひ出してもゾウとするほど狂的でしたね。

あなたの御陰で『商業之大日本』がどうやら物になりさうになつた時には我々の困窮は絶頂に達して居ました、よくあの窮況を切り拔けることが出來たものとつくゞ〳〵思ひます、ロンドン君は生れるし　内外多事、丁度今の私が當年の先生と同じ年配で同じ經路をたどつて居ます

麻生先生

『三越は稼いだ金で買へぬとこ』に共鳴し『果敢なさは車掌の戀の刹那主義』に同感し『夜逃げ前樂隊までも雇つて見』にあの頃の自分を見出したことでした。苦しみの中に『商業之大日本』は先生と私とが出て了ふと間もなく完全に沒落しました。

死んだ子の年を算へるやらで可笑いですが、彼の雜誌を今頃まで續けて居たら恐らく第二の懷手が三册も四册も出たことでせう　そして二人は今頃は雜誌成金になつて居るかも知れません、しかし何事にも飽つぽい資本家のお坊ちゃん相手の仕事でしたからアンナ風になつたのです。

麻生先生

先生は今でも資本家相手の仕事をして居られますが　隨分人知れぬ御苦心がおありの事と存じます資本家を操縱し教育する爲めには……。私は資本家に使はれることが出來なくなつて　先生の御盡力で漸く貧しいながらにも半本立ちになつて『映畫と探偵』を出せることになりました、そして先生と柴谷柴舟兄の御好意で、毎號川柳漫畫を戴いて居ますが、これを見ると　どうしても第二の『懷手』が出して頂きたくて仕方がありません、『映畫と探偵』はよし潰れても『商業之大日本』は廢刊されても先生の『懷手』が殘つたやうに、第二の『懷手』を殘したいと思つて居ます。

麻生先生

あの時から考へるこもう足掛八年になりますね　ロンドン君が今年から尋常一年生になれるですから隨分長い事になりますね。先生には其後奈那、アート、リリの二女一男を加へられ私も女房を拾ひました。考へるこ先生も私もお荷物が殖ゑた譯ですね、お荷物が少かつたゞけにあの時分は元氣でした。メートルが上つた譯ですね　此頃の若い人の小賢しい顔を見るこさうしなければ生きて行けない、それ程左樣に世の中が暮しにくゝなつたのですね。私は此頃脱線する事を知らぬ人種を氣の毒に思へて仕方がありません　要するに、脱線する所に人生の面白味があり、又川柳味があるこ思ひます　脱線しない、一に一加へて二といふやうな方程式で生きて居る人達にこつては氣分なんてここは分りつこがない。こんな人間が多くなりましたね。『千日を後戻りする懐手』なんて氣分は樂にしたくても無くなりましたね、ラヂオ全盛、キネマ全盛時代萬歳です、創造なき時代、附和雷同時代、日本が支那化して來たやうな氣持がします、川柳化する時代はいつになつたら來るでせう。先生の任務は益々重きを加へるこ思ひます、切に御自重を祈ります。

南陽藝妓の試驗

食滿南北

△誰が思ひついたのか、拙者を南陽藝者の試驗委員に奉る、
浩水子、芳哉園子等机を並べて試驗の間に間に盛んに川柳をはじめる
美醜われ關せずこ蓬吟點をつけ
だこ誰やらから云ふて來る　當夜蓬吟大人はじつこ舞臺を見つめてゐる、
さうして　連獅子七十五點　鶴の聲六十八點山姥八十五點、書き入れてゐる
一流が出るこ朝霞のやかまゝさこ又誰やらから云ふて來る八千代やこ
○○や、おきよを一流にした江上朝霞先生は小秀、小八千代、松水こ云つたやうな土地の名妓が出るたびに意見を述べる其聲が頗るタイランカルデある
長いのになるこ南北たばこなりこ又誰やらから云ふて來る、吾妻八景や秋の色種こなるこうんざりする程長い、夢はふざんの……
合の手がやつかいだ南北はネビーキヤットを捲きはじめる、さうして浩水氏はてんごがきをする。
士行子は又浦島を聞かされる
叔父君の作、新曲浦島の出るたびに坪内士行先生　妙な顔をして舞臺を見る『アレいつの間に一つ星
士行子ツク〳〵こ感心して點をつける、『ヘイ次は百五十六番』
スラリッこしたのが其處へ坐つてちよつこ此の連中に一禮して又秋の色種をはじめる、
南北が横をむくこ其處には土地の老妓がコクリ〳〵こ居ねむつてゐる。

川柳世帶道具番附

横綱 同

大關 同

關脇 同

小結 同

前頭 同

醉ざめの土瓶の蓋が鼻に落ち
眞夜中に俎板にらい音でおち
提灯の埃片足庭へ降り
下駄箱へ靴を入れるも日本人
立話バケツの水は越してゐる
女房の氣性は簞笥艶を出し
釘ぬきが要る國からの送りもの
むつこしたハタキにインキ引つかゝり
鍋蓋へ一こ切のせる忙はしなさ
四疊半のけた所は屏風なり

横綱 同

大關 同

關脇 同

小結 同

前頭 同

わが家へもたれて熙明日を待ち
飯臺を押さゐて立つこ茶がこぼれ
子の出來る茶碗で一人睦まじい
言譯に來て火鉢へは遠っざかり
張板へ來しかくれんぼ叱られる
意見した方も寢られぬ煙草盆
米櫃を一度見にやる音がする
鑄掛屋へ添ふて五年の釜を見せ
雜布はねらい定めずほつてくれ
泣き止んだ女鏡の前へ來る

御免蒙

司行

新世帶未だあれもいるこれもいる
新世帶舅が來ては棚をつり
新世帶樽の上で味噌をすり

寄年

糠味噌をきたなががらぬは一度目也
諦めてばかり女房も世帶馴れ
世帶が世帶女房束髪ばかり結い

勸進元

古今川柳家

版元 啞人

前頭 同

緣側を一つぞやして掃きじまい
かなだらい養湯を汲んでほうり出し
重箱の隅でこごめを芋さされ
吹き降りに首を呑んでる蛇の目傘
鼻毛拔かたくつかんで馬鹿な面
ものさしで足らぬ〳〵こ叩いてゐ
叱られて女房七輪外へ出し
剃つてゐる亭主に急な用が出來
摺針を押へるものが五六人
先生を呼んで灰吹すてさせる

同頭 同

うたゝねの枕させたは知つて居り
割箸をつけて數える臺所
十能の釘うたされて炭屋去に
損德で消すのではない火消壺
目覺に明日をかけて眠くなり
算盤を二度手にこるこ値がきまり
一ぱいに酌いだ盃膳で飲み
竹細工錐をやすめて裏を見る
足の爪鋏いろ〳〵持ちかへる
高松の宿を賑はす澁團扇

人間は專制性の動物である

大島濤明

◇蓄妾

富豪顯官の惡癖に蓄妾といふがある丁稚から仕出した癖に少々金でも出來るとすぐ若いのを圍つて、己れ一個の專有にしたがるが人間である。

成金は妾宅といふ檻を持ち
何をしてゐても妾の日が永い

◇愛犬

野に遊ぶ男は犬を愛して意のまゝこし用なき女は猫を飼つて藝をさへ教へる、それも人間の仕業である。

愛犬は主人の杖に齒が痛み
一日はタマの首輪に日が費る

◇飼魚

厭がる魚を無理やりに金魚鉢に入れ、座敷へ運んだり窓に釣したり、逃げやうとあせつて鼻を打つ姿を見て悦に入りたがるのも人間である。

美しい色が金魚の不運なり
金魚鉢硝子一重の生命也

◇愛禽

無限の世界に戯れてゐる小禽を欺して、籠に入れ、泣け鳴けと攻めるのも人間である。

籠の鳥同んなじ枝に草臥れる
啼く意味も知らぬ人間悦に入り

◇庭園

大きな樹を庭に植、枝を曲げ、葉を剪りかくて景色がいゝなぞゝ眺めたがるのも人間の愚である。

專制な愛に庭の木育ぐまれ
庭石に立つと女は景になり

◇盆栽

狹まい鉢に根をたくね、枝を縮めて植付け　天分の發育を抑制したり、そしていゝ盆栽ですなあ、と自惚れ合も亦人間である。

室咲のいつとはなしに花が散り
鉢の梅曲りくねつた値が決まり

◇壓制

さる程に天賦の人間の專制性を押にるに法律を作り、道德を唱へ、宗教を强ゆる人間の弱さ　勝手さ、何處までも我儘な卑しき人間の本性かな。

泣くといふ武器で赤ん坊我を通し
我こわが心にぶたれ手を合せ

――（一四、一二、一）――

漫畫

正月が產んだユーモア

柴谷柴舟

モーニング

某會社の元旦、祝盃を手にし乍らの兩人、甲『新年はお芽出度う』乙『やあ相變りませず、ごうぞ……時にリュ、こしたものだね君のスタイルは』甲『馬鹿云へ鮮魚ぢやあるまいし……こ云ふものゝ片身だけは完全に俺の物のさアッハ、、、、』乙『ワッハッ、、、』

◇新戎橋より

万よし生

▲上下と左右

列車中では一寸横臥しても車掌の拳突を喰ふ心配があるが有がたいことには、いくら脊伸びして大欠伸まで添へものにしても叱られる例はない、此頃の支那の英雄の樣に、横にばかり勢力を張らふとすると往々急轉直下奈落のごん底に墜落するがわれ等の思想の延長と觀察の深刻さは、上金星に至り、下地軸に達しても一點の障害さへも見出すことがない、文化の生活に壓迫せらるゝ兄弟よ　美しい瞑想こ自由の詩境に進まうではないか。

▲川柳の平仄

漢詩でも、英詩でも　和歌でもリズムのない詩は絶對にない。起承轉結はすべての詩歌の要素であることは俗謠を見ても知れる。京都三條糸屋の娘（起）姉が二十で妹が十九（承）諸國大名は弓矢で殺す（轉）糸屋の娘は眼で殺す（結）わ

ラヂオ

一個のレシーバを夫婦が片方宛耳に當てゝ鼻突き合つて聞いてゐる時、友人の耳がやつて來た、主人『今年は龜の正月だ旅行しやうにも溫泉へ浸るにしても餘りにボーナスがキンシヨウに過ぎたヨ嗚呼龜の正月に限る……』客『オイ〳〵あんまり龜でもなからうよ女關から見た所は流行の小鳥セキセイ。インコのやうだつたぜ仲が好いネ』主人『妻が呼ぶもんだからつい……でも一寸良かつたよ』客お手柔かに……僕もう歸るヤリキレン……』主人『ラジオだヨ。君放送が良かつたんだヨ』

れ等の川柳に於ても起承轉結の妙味を研究すること無限の趣きがある例へば

君見たまへ（起承）蒲葵草が伸びる（轉結）
十三日までは（起承）大石笑はる（轉結）
手拭屋 起）流す見て（承）竿の先（轉結）
まあいいさまあいさ（起承）眠る（轉結）

京都三條の俗謠でも以上の例句でも詩歌の妙味は轉結の文字に存する事を得るではありませんか。

▲努力と天才

大隅太夫が淨瑠璃の習ひ初めに三年もして節にならぬので止めやうとしたのを初代の團平が慰撫叱正ついに大隅を當代の名人にまで研き上げた。桂太郎は他の同僚が大佐時代に大尉に甘んじて切瑳琢磨ついに首相の位置になつたときの歌に『一日に十里の道を行くよりも十日に十里行くぞ嬉しき』といふのがある。山陽曰く『われを天才といふものわれを知らず努力の人といふものよくわれを知る』名句の生るゝに天才と雖も努力の要することを知るべきである。

募集句

太陽

井上劍花坊選

眼がつぶれそう太陽を見る涙　寸馬
アンテナにとまる蜻蛉へ夕日さす　柳秀
太陽の朝晝暮にちがふ色　默劍
水平の彼方太陽の寢るところ　鹿の子
太が出て降參の旗と知れ一路　深呼吸太銀ぐるみ吸ふころゝ　白蝶
太陽が玄關口へのぞく頃　駿馬
その罪を太陽日蔭者にする眠　聲
汚れ物それも太陽かんと照り　花泉
御來迎御花畑の露が散る　逸錢
太陽の前を一番汽車が過ぎ　隨帖
巡禮は西へを受けて宿に入り　憲翠
太陽に負けた仕事に灯がともり　助六
一坪の庭へ太陽小半時　万よし
太陽は曇る心にまぶしすぎ　琴月
太陽に追いたてられて生きて行き　露斗
太陽を吸ふて黑土春となり　雅幽
太陽が出て萬物に影を添へ　清春
太陽の海に沈むを見屆ける　十字路
太陽の眞下で乾く馬の糞　聞路
太陽の隱れて歩くよい女　同
(五客)炭坑の中を太陽まだ知らず　のぼる
旱魃を太陽知つて知らぬ振り　一枝
太陽の外にも西へ急ぐもの　文錢
仁王尊下半身へ陽を浴びる　万よし
傘さしてみな太陽をさけてゆく　二柳子
(人)槍投げは太陽を射る姿なり　吐露樓
(人)旅の朝勝手の違ふ陽を拜み　乾坤
(地)太陽に面と向へば何も無し　盜泉
(地)太陽を殘して飯にみな戻り　史朗
(天)太陽の儘に人間逆らはず　助六

襟垢

襟を拭く母は火鉢を遠く逃げ　月兎
髮結ふてゐる襟垢の目立つなり　史朗
襟垢に冷たさを知る頃となり　奇骨
これ以上襟垢落ちぬ色になり　隨帖

椙元紋太選

川柳家の戸籍調べ

□　係　馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(50)　篠原春雨

(一)篠原春次(二)春雨(三)龍耳庵(四)甲府市櫻町八番地(五)明治十三年五月廿七日(六)新聞記者(七)矢張り柳だるより武玉川中に好きな句があります(八)純日本式の女、活潑で愚痴を云はぬ女(九)「哀れさは白痴の娘色氣つき」「せがまれて江戸が見えたを繰り返し」「二人泣く丘の立木の裏おもて」(一〇)長唄、義太夫、落語(一一)有(一二)昨日と今日と別なことを云ふ人、鼠の死体(一三)日清戰爭當時狂句に手を染めたのが初まり「女武門原田重吉こゝにあり」當時の句。

(51)　青祇不二綱

(一)青祇義久(二)不二綱(三)舊號は澤山ありますが現在は和歌でも俳句でも不二綱の一點張(四)松江市天神町(五)明治廿九年十月六日生(六)勸工場を經營(七)新星會發行の年集收錄のやうな向は皆好き

寢付かせてから襟垢を落してみ　無心
青春の悲哀を語る襟の垢　突支坊
桃の花咲いて襟垢浮いて來る　炭車
替へたカラー首筋拭いて着け　仰天子
片膝で押へてこする襟の垢　聞路
襟垢が少し氣になる貸衣裝　一聲
もう明日とあさつてと言ふ襟の垢　しげる
襟垢をつけて先生らしい人　里塔
襟垢へ病夫は感謝するばかり　一路
十八と言ふに半襟垢染みて　逸錢
襟垢を隱すショールの派手な事　禮心坊
道はな子だと襟垢つきつける　山月
前借のもう捨ばちに襟の垢　眠聲
そこら中擴げ襟垢ふいてゐる　幽里
襟垢の氣になるまゝにたゝまれる　放馬
襟垢が揮發の綿に移つて來　千烏
一日でこんなですと白々揮　同
しどけなく脱いだ着物の襟の垢　枝呂
塗りたてた顏襟垢に氣がつかず　同
よごれてゐ襟直されるはづかしさ　憲翠
朝フット寢卷の襟垢を見る　同
襟垢に都會の埃り知れる也　吐露樓
襟垢を意こせず質屋貸してくれ　同
ちり紙を襟にはさんで市場へ來　十字路
女房の襟の汚れを見るにつけ　同

狸寢へ襟拭く揮發匂ふて來　万よし
棚經の役僧の襟汚れてる　同
脱ぎ捨てた晴れ着に今日の垢を見る　助六
襟垢に床屋何とも言はず見る　同
襟垢を拭く妻お湯のことを言ふ　濁水
着た證據らしうに今日の襟の垢　同
襟垢に辛い生活のあからさま　乾坤
人なかで襟の汚れを淋しがり　同
朝風呂で襟垢を見る恥しさ　駿馬
襟垢に油もまぜり粉もまぜり　同
もう找慢出來なくなつて洗張り　同
襟垢は縞目も見せず光つてる　白蝶
襟垢を妻はショールに包むなり　同
襟垢のついた襦袢を寒く着る　同
襟垢へ不過時代の續く事　馬行
襟垢の我と思へぬ衣紋竿　同
襟垢を氣替への時に不思議がり　同
襟垢の氣になるまゝの二三日　同
(佳)物干の陽に襟垢の目立つこと　幽里
(佳)襟垢のまんま行李で夏を越し　拔天
(佳)半襟を洗つて居まかざをさぐ　のぼる
(佳)好い姉を持つて襟垢こがれ　夢坊
(佳)襟垢の付かざなしに悲觀をし　馬行
(軸)襟垢のまゝで着てゐる獨りの日　紋太
〻見かう見るうち襟に垢が見ゐ　同

(八)眼のくるつとした愛らしい顏で普通よりも少し肥つた方(九)まだありませぬ　ぞうせ作るつもり(一〇)安來節(一一)現在なしこんな田舍でも來しやらうと思ふ樣な女があつたらどうかお世話を…(一二)煙草、酒、齒や胃が惡いから堅いものは凡て嫌ひ、暗合(一三)明治四十三年より二三年やり八年程休んで大正九年から復活今度は一生やるつもり

(52) 小西兎絲子

(一)小西太範(二)兎絲子(三)一洲庵、松石齋理啓、花號)一洲(盆號)(四)金澤市味噌藏町下中一四六(五)明治十九年九月廿八日生(六)教員但小學校奉職(七)「日本人借りて來しまで貸してやり」路郎(八)飾らないで眞面目に會話する女(但し面に要求なし)(九)偉大さは吾身を知つた迄の事」(一〇)生花、盆石、點茶、繪畫、旅行、讀書、(一一)有(一二)幇間根性の男、理屈家、出過ぎた女性、脂肪濃い食物、勝負事、長坐する酒呑み(一三)日露役後の頃復活大正九年六月

(53) 荒木京之助

(一)荒木彦助(襲名)(二)京之助(三)幽村(四)山形縣酒田町內匠町(五)明治廿三年二月十二日生(六)米穀商(七)「咳一ツ聞ねぬ中を天皇旗」劍花坊(八)梅村蓉子型の女、但フィルムで見ただけ(九)「蒼白い水を見てゐる青い顏」(一〇)劍道、私設

夫人

案外な事は夫人に名を知られ　十字路
植木屋の世辭を夫人は輕う受け　助六
しとやかな夫人の歩み馬車へ消ゆ　山月
米の値も知らぬ夫人の說を聞き　一路
令夫人近頃馬の趣味を持ち　鹿の子
主人默し夫人喋つて金があり　萬よし
クッションへ夫人無聊の身を投ず　白蝶
連れもなく夫人出歩き過ぎる　隨帖
着飾つた今日の夫人へ雨となり　凡平
當然のやうに外出する夫人　乾坤
新任の夫人は記者に逆らはず　聞路
一週忌夫人一層若く見え　同
一門の写眞に夫人一人抱き　同

紋付

◇　柳路選

紋付の皺嬉しさの一つなり　白蝶
紋付が先へ提灯持つて行き　霞人
借着して來た紋付が畏まり　突支坊
紋なんかどうでもよいと借りて來る　逸錢
草臥れた顏で紋付歸つて來　柳秀
紋付で出て夜遊びの邪魔となり　文錢
紋付を着ると母親老けて見ゐ　柳骨
紋付は直つすぐ家へ歸るなり　聞路
紋付の一人一人が折を提げ　吐露樓
紋付で會へば葬式かと聞かれ　乾坤
紋付で勝手の違ふ庭に立ち　三平

塚崎松郎選

抱車夫夫人の世話で嫁を取り　馬行
失戀を未知の夫人に慰まれ　同
顏見せぬ夫人を聞けば產んだとか　同
誇張して夫の辯を夫人云ひ　同
(佳)庭石へ夫人の裾が縺れさう　聞路
(佳)今晩も夫人妾を怨んで寢のほる　同
(佳)またそれもお飽き遊ばす令夫人　白蝶
(佳)その出好き夫人近所に羨まれ　馬行
(佳)夫人から秋の淋しさ敎へられ　同
(人)御夫人の前を遠慮のない大工　一路
(地)裏切つた事を夫人へ詫び來る　三平
(天)情熱を包みかくして夫人來る　馬行
(軸)幕合の夫人藝者の方へ向き　松郎

岩崎柳路　森田輝翠　共選

道場を持つてゐます)(一一)有(一二)策略主義の人間(一三)大正九年の春

(54)　關本雅幽

(一)關本雅幽(一)雅幽(二)正二(四)大阪市港區鶴町三丁目一一〇番地(五)明治卅年六月十六日(六)運轉手(七)駄洒落の要らない句(八)眼でものを言ふ女(九)一生涯出來ぬと思ふ出來たら川柳と椽が切れる(一〇)喧嘩口論(一一)自家用に一人あり外出用に一人欲しいと思つてゐる(一二)みつば、蕗、菊菜(一三)大正十二年春

(55)　森　案山子

(一)森清(二)案山子(三)福壽莊、吐月峯山人(四)大阪府豐能郡麻田村箕輪一六五(五)明治卅四年五月十二日生(六)電鐵從業員(七)「うつむいて叱られ振りのいゝ女房」古句「灯の搖るゝが風の姿なり」日車「泣き事を嘘と知りつゝ貸してやり」路郎「京の雨大津の雨を二人逃げ」水府「夏服へ去年のはねがまだ殘り」眠聲(八)ゐくほに入りこむ女(九)追々出來やうと思ふ(一〇)魚釣、落語、(一一)有(一二)なし(一三)大正十一年五月頃

(56)　太田一聲

(一)太田敕(二)一聲(三)眞琴、朝陽(四)和田市下野町四一九(五)明治廿六年十月八日巳八白(六)會社員で洋食屋の監督(七)澤山ありすぎます(八)肉體美で色も香もあるもの(九)結立てを鶴の首程出して見せ(一〇)謠曲、聯珠、詰將棋、蒐集

妾宅へ來て紋付を疊ませる　史朗
紋付は自分一人の終電車　同
佳作

紋付を斯う着こなすも女人なり　文錢
靜けさは紋付並ぶ御道筋　山月
紋付の袖メリヤスを長う出し　寸馬
葬儀場出る紋付へ寒い風　白蝶
紋付で師匠見事に舞納め　普天
玉垣の寄付に紋付二人來る　眠聲
紋付の譯を知つてる抱俥夫　隨帖
紋付に花代高い事を知り　三次
紋付の揃へで踊る天理教　炭車
紋付に女房は足袋屋まで急ぎ　憲翠
紋付で隊の言葉はまだ去らず　助六
紋付に去年の儘の皺があり　史朗
紋付で來て咳の出る御挨拶　馬行
(秀)紋付で後見人に坐らされ　史朗
(秀)貧しさに紋付の要る日に出合　乾坤
(軸)紋付があやつてるも松の内　柳路

◇　輝翠選

紋付を着た上席は髭が伸び　里塔
五ッ紋床を背中にして坐り　鹿の子
縞物の割で質屋は貸さぬなり　寸馬
紋付がドテラに代る四疊半　万よし
紋付を脱ぐ頃可成醉つている　白蝶
自動車を恨む紋付二三人は　大流
入營へ親の紋付短かすぎ　駿馬
借着して來た紋付がかしこまり　突支坊
紋付を貰つて番頭別家する　普天
紋付の始め堅苦しくも飲み　逸錢
紋付の羽織に用のないくらし　花泉
紋付來たことて遠慮するな呑め　露斗
折り下げたごの紋付も酒氣分　一枝
紋付でたらはだかつた禮者なり　盜泉
紋付で痺れた足を持て餘し　駒帖
紋付は振舞酒に口がすぎ　柳秀
紋付にしばし生活難もなく　吐露樓
紋付の裾を妹はいぢつてる　奈良藏
紋付を裁つお針子の手が震ひ　南天棒
紋付を親しい友に借りられる　憲翠
窮屈をこほし紋付歸へて來　千鳥
紋付で羽根つく妻の若く見へ　すみかづ
紋付を着て新らの足袋新らの下駄　助六
紋付を脱ぎステゝコに座は開け　清春
紋付を着ると心が四角ばり　柳骨
繼紋の後ろ姿を見居ける　山月
紋付を脱がせて醉わす心算なり　同
紋付は一人息子に嫁をとり　眠聲
紋付へ袴の紐がとけかゝり　同
代理で來た紋付は後に立ち　史朗

品各種・旅行(一一)有(一二)停電と俄雨(一三)大正拾二年五月本誌の前身みをつしを讀んで。

川柳書架　(一四)

川柳江戸歌舞伎

(西原　柳雨著)

▲その著の自序反凡例の一節を紹介すれば、一、本書は江戸時代の芝居及び一般興行物に關する古川柳狂句約四千有餘句を集めて分類解說を施したものである。一、著者本來の目的は川柳の方面より江戸時代の世態人情風俗習慣等を研究せんとするのにある、されば嚮には川柳吉原志を刊行し今又此書を上梓したる所以である。故に此目的に適する句は名句と駄句とを論ぜず、出來るだけ多く收拾せんことを期したのである但し甚しく卑猥なる句、殆んど同吟の類句等はこれを省除した。▲本書には坪内博士の序及岡田博士の跋が擧げられ本書への光輝を添へてゐる。▲大正十四年十一月廿日發行。四六版六五七頁。索引一二頁。定價參圓五拾錢。發行所は東京市日本橋區通四丁目五番地・春陽堂。▲本書は著者西原柳雨氏の自序の一節にもある如く、川柳詩そのものゝ研究ではなく、古川柳及狂句

紋付を脱いであぐらの我になり　同
恥しさ借着の紋を褒められる　乾坤
貧しさに紋付の要る日に出會ひ　同
紋付にチト肩の凝る氣持する　馬行

各地柳壇

松郎編

紋付は素早く嫁にたゝまれる　同
（佳）紋付で來て仲人だけの役　三平
（佳）紋付の背中をれて羽根が落ち　のぼる
（佳）紋付で來て咳の出る御挨拶　馬行

◆事務所小集（十二月五日）　二柳子報

年の瀬の中に交通巡査立ち　雅幽
疊屋は師走の風に敗けてゐず　二柳子
年の暮もう終點へついてゐる　路郎
十二月首たけ入れて呑んで行く　同

◆かほる居倶會　かほる報

十二月七日。やつぢやにおもちやをおすもじを貰ひ早速茶をせんじ彼の女にくませるとまあ嬉しい茶柱が立つ「今日だれでさはりまつせ」と彼の女が云つたのできつとだれか見へると思つてゐたら、噂をすれば影とやら、路郎氏ともう一人が其…吉岡鳥平氏だそこは端近とも何とも云はずに二階へ通つて戴いた。割にお二人とも早く歸られたのでほいなく思つた。

「悟氣」

代筆をたのまれたのが妬いてゐる　路郎
悟氣から洗濯物はつけたまゝ　同
養子いさゝか妬かせる味も知る　同
生活苦悟氣ごころの沙汰でなし　鳥平
島の内たゞなんとなく鬱をすり　同
寢て込ます氣が女房は帶を解き　かほる
悟氣又立膝したり座つたり　同

◆刀三居倶會　刀三報

美少年着ぶくれて來ておこなに　松郎
手袋に父を訪ねる美少年　同
繃帶の横顔みせて美少年　同
美少年ハツキリ言ふて横を向き　刀三
奥樣と共に痩せてる美少年　同
滿員に押され勝ちな美少年　同
毛ゞ屋へ姉の使ひの美少年　馬行
女學生に反して美少年ひとり　同
僕歌が大好きですと美少年　同

◆樂園小集　万よし報

十一月廿六日天下茶屋にて

による江戸歌舞伎を中心として世態人情風俗習慣を研究されたものであるから歌舞伎方面の研究者に取つては珍書ですべく、古句研究者に取つても又珍らしい本である。著者が古川柳研究者として第一人者であることは贅するまでもあるまい一讀を薦む。

川柳書目錄（俳書目錄の附錄）

南久太郎編

▲俳書と川柳書との藏書目錄書である。殆んど俳書柳書を網羅してゐるところにこの書編纂の價値は充分にある。編者南久太郎氏は書肆公立社主藤堂早氏の別名である。その自序の一節に「わたくしは、少年の頃から書物を見ることが好きで、到頭一生を書賈として送ることになりました。顧ると、過去三十餘年間、文學に關したことゝ、何といふ差別なくやつて見たのですが、天賦の鈍才、終に一つとして物になつたものはありません」と謙遜し　ゐるがこの藏書目錄を見ただけでもへボ俳人へボ川柳家のよりつけるところでないことを證して居ります。

▲大正十四年十一月二十日發行菊版半截三十八頁定價五拾錢。大阪市南區日本橋南詰南入公立社書店發行。

首つりの財布に殘る銅貨なり　祇　梵
ぢゞ黑いふんどし見て首をつり　かほる
月が出て首つりはつきり見出され　ひろし
首つりの話に舞妓そばへ寄り　三次
檢視來る迄首つりの派手な事　万よし
首つゝた男とも角下ろされる　月兎
親もあらうにと首つりを見て歸り　松郎
首つりの四五人迄恐く寄り　同
首つりの文樂程になりにけり　波郎
なくなつた女房の紐で首をつり　同
首つりの帶もしつかり結んで居　塊仙
首つりの裾を此の世の風が吹き　同
粥半分殘したまゝで首をつり　馬行
首つりのなんでも去年嬶が死に　同
首をつるにも見晴しを考へる　溪花坊
首つりに氣を腐らしてゐる地主　同
首つゝたことを亭主はちややで聞き　路郎
首つりは子を活動へやつておき　同
首つりの女々しい脚が長すぎる　刀三
煤落ちてから首つりの氣が變り　同
首つりか壁一杯に寫るなり　同

◆常緑唸社句會　紀伊妙寺町

安　産　（十二月一日小集）

國民の御安産を祈る陽を仰ぎ　佳暢
電報の安産と書く氣の輕さ　柳聲
名前だけ先に二人はつけておき　均水
安産の便り聞く夜の晴れた顏　無空
その達者産婆來ぬ間に産んでる　十世
産湯さす時の姑の笑ひ顏　同
男の子ですよと産婆聲を掛け　玉仙
今出來たばかりの子に頰を當て　同
安産へ母のつくしの赤産衣　庚子
早いもの今日から親になりすまし　同
安産へ笑顏幾つも訪ねて來　無心
安産は安産ながら女の兒　同

◆芽生川柳會例會（金澤）

十一月十三日　中川眼隱子宅

出席者　銀砂子、笋陀六、すみ三、麻畔、かね子、喜花、庄之助、柳二郎、呑氣樓、冬聲、眼隱子、粗影、白葉子

父として愚かには見ぬ刺身　皿　眼隱子
流行唄も知らずに父の手で育ち　冬聲
疲れたるやうな廓に陽が高し　銀砂子
畫の香具師チトロごもる品を持ち　すみ三

兼題　帆柱　麻生路郎氏選

まだ船は出ず帆柱に鳥が鳴き　喜花
松之助帆柱脊に見得を切り　みだ六
帆柱の綱に丹前干てあり　同
帆柱に寄つて今夜のハーモニカ　眼隱子
ねぢけてる帆柱書いて○がつき　同
帆が下りた帆柱並んで黃昏れる　冬聲
急に乘り帆柱搖れて面白し　同

◆　◆　◆

女房あなた近頃大變老けて來ましたねー
亭主お前は毎日鏡に向つて居ても自分の顏の老けるのがわからないんだなあ
女房妾鏡に向ふたんびに貴方、こ釣合の取れる樣に苦心してゐますのよ（雅）

食後小句

蛭子省二

ごつちかが時計を卷く日散歩する
履歷書は三枚續き氣疲れ
三年前の處方箋をみる貧乏
湯歸りの女故障車横切りて
樂燒へボートワインは懺悔めき
株買つて煙管掃除に日が當り
浮世離れて井戸蓋へ虹

▲社中切つての酒豪　郵便局長放馬はその字の如く万よしで呑んだ酒からごうやらすること發展し過ぎるこの噂。或日の畫松郎こ馬行が郵便局を訪問するこ畫網の中で別人のやうな精勤ぶり。外へ出た松郎こ馬行顏見合し『ライオンも金網にゐるうちはアカン〳〵』　B）

柳樽

通釋二篇素讀

蛭子省二

初篇は求めたまゝ書架に上せてあつたのを、九月初旅行の際車中で三分の二をよむだと云ふ不熟心は、著者山椒先生に恥入る次第である。爾來宿疾のため苦悶の折柄、二篇の出版を廣告にてみしも内地保養の時購入しようと、ゆつくり構へて居る内に、本誌に東魚半文錢兩氏の異見が載せられた、自分は夫れを見た日直に愚見を認めたが、其後(十一月三十日)有朋堂から漸やく著本、今回は大勉強で一夜を徹して素讀し、病人ゆゑに聊か神經衰弱氣味で本稿を執筆、教を仰ぐわけ、尤も柳雨、卯木兩氏よりも、曾て異見のある事を申越さゝて居るから、古句研究專門誌上多々發表があつて拙稿を重復する恐れなしとせざるも、本誌のみの愛讀者もある事を信じ、又自分の誤解駄勞解も一夕のお慰みともならうと、主幹にお願してよし他誌より遲るゝも掲載して頂く事にした。(十二月三日)

(四) つく田へも二人ぐらひは厄拂

あんな所こ見縊られてはゐるがこあれど、佃島住吉神社なごは當時有名なもので、佃は見縊られる程つまらぬ所ではなく一町離れても海を渡るこ云ふ浪路を大ケサにいつたもので『二三人海をも渡る厄拂』

(二二) 木藥屋でつちぐらいは内でもり

『此丁稚は藥種屋の家のこも外の家のこも兩方にされる』こあれど、之れは前者の場合なる事明瞭である。

(二三) 長局なんたる願て納太刀

博奕打石尊願掛の事が主こなつて說明されて居るが『二の足で間男の買ふ納太刀』なごこ列ぶべき句で『盆山へ一筆たのむてんば下女』もある。そうでないこ長局がいきぬ

(三〇) 正月はもみ手で路次のかぎをかり

『家賃が滿足に拂つてないため』ならば 敢 正月のみに限らない、寧ろ『元日にいけしやゝこ蘇がへり』である これは正月遊び過ごして鍵を借るが連夜である遠慮こ思ふ。

(三六) かま拂われはゝ女の氣でき歩き

原解に贊 只中七は羽衣なごの『我も數ある大少女』なごから脫胎してきたものであらう

（四四）方丈は雑藏へ來ていちやつかれ

原解は坊主の身で女と庫裡などでいちやついては居れぬ、恰好の場所は雑物藏であると　古老の話に雑藏へ婦人を隱して置いて方丈さん時々やつて來てはフザけるとこんなのが實際に隨分あつたものだと

（五二）そり橋へ來ると禿は對に成

『渡るのがこはいので　先のが立止まる　後のが追付く』では下五の柳味が乏しくはなからうか　アノ木履で反橋は渡りにくい　相互に左右の欄干につかまつて、子供心幾分競爭氣味で渡らうとするのを　詠むだ可なり複雜の光景であると思ふ。故に『やりくりに禿を別に裸にし』とか『にげたあと禿は對にしばられる』『ひぜん迄二人禿は對にやみ』？などの　對とは聊か趣の違つた深刻味がありはせぬ乎。

（一一八）宿下りとなりの内儀一寸ひき

『踊で奉公に上つてゐる娘……隣の内儀へまあ一つと猪口をさして置しやがて　踊の地を彈いて貰ふ』とある。私解は『宿下り三を結むで一つ彈き一『糸のない三味線の出る宿下り』で親子水入らず宿下りが陽氣に騒いで居る所へ　隣の内儀もやつて來て　昔習つたのを一寸彈いて大笑ひになる團樂

（一四三）寒念佛夫婦の中をさむがつせ

『夫婦が暖かくねてゐる　寒念佛が軒下で　經文を誦してゐる女房が　志をやる　折角暖まつたのが冷しまつた』とある私解は殊に風が吹いて淋しい夜だ『寒念佛みりゝくと歩くなり』報謝をして戸を締る　突然身の毛がよだつ樣に寒くなつた

『我よりは人にさびしき寒念佛』やすむ事にしようか、二人きりの若夫婦の一夜。

（一五三）四斗樽へ珠數の切れたを溜てみせ

『賽錢を受ける爲めに四斗樽をかついで歩く』のではない。賽錢には關係はないでしよう『四斗樽が大師のあとを追うてゆき』『四斗樽とござも晦日に座をうつし』

（一五四）里歸り女關に杖とはなねちり

『嫁入つた檢校の娘』と丈けではチト足りない　杖はお悅びにきた勾當であらう。はなねぢりは十手で松右衛門なぞの非人頭の携帶具　祝儀不祝儀に金を強請にゆく　此兩者を配して里歸りの盛況を思はしたもの。

（一五八）一村をすいにして立、旅芝居

『娘つ子の白粉の付け方迄ちがつて來た』とある　私は其娘が役者と關係したので　一村其噂で持切り　一村芝居後家二三俵ぞらを打ち』に列べき句（但し『一町の皿をうごかして宿下り』は本句と同巧異曲で、宿下りが其男と關係したと云ふわけではないが　旅芝居の句は研究前記のやうに解してみました）

（一六三）出き　いとしいふ振袖はぞたくし

『此娘實は自分の姿の惡いのを自覺してゐるので』とあれぞ、川柳によく詠まれてゐる肺病娘ではいけません？

（一八二）綿はうしだけは佛師も心得て

十月十二日連上人會式がある『御會式の櫻も吉野紙ですする』『鳴子道冬も會式の花見連』などがある『きせ綿を菊の時分にうりあるき』は上人の御綿を菊に掛けたもの『御肴といふ身で

はさむ綿帽子」なごは類句でなからうか。

（一九六）　ここ一見せの將棊は一人腰をかけ

髪床見世が狹いからこの解では面白味が薄いように存じます。髪結床は京阪に比し江戸はお粗末であつた、殊に兩國橋親父橋畔の並び床の如きは　間口六尺奥行九尺店で一夫のみであつたが、町うちの床はスケもあつて二人三人も立つ、必ずしも將棊が腰掛けてさせぬ程狹隘なものでもなかつた。一方がしやがむで居る所に兩人の階級も窺はれる　例へば旦那衆こ若い衆か、そして一方はお客樣、他方はスケなごの近所の遊び仲間で、暇にまかせ將棊をさしにくる。側の助言者は立つて居るこ云ふ床見世氣分に全く浸つてゐる句だこ思ふ。

（一九七）　こうろ賣やんま追ひ〳〵歸るなり

『盆灯籠賣は子供が多かつたのであらう』このみあるが、來る時は精靈を迎へて祭る燈籠をうり、歸る折はヤンマを追ふ殺生に對照した氣味のもので、旁燈籠を賣つてしまへば竿の悲戯にもつてこいだ。

（二〇二）　お物師のふきがら一つ氣が違ひ

私は男こして今迄解してゐました、貴重なものを取扱つて居る責任觀念から　下五が生れたこすれば、男の方に句の重味は出てくるやうですが。

（二三三）　色事にはねのはへたる清水寺

心中こ解されてあるが、自分の今迄の思ひ違ひか『傘でこんだ話も若さかり』『添ひこけてのぞけばこわい清水寺』だこ許り思つて居ました。

（二三四）　厄拂御菜の内で手間がこれ

お菜はツマラヌやうな者であるが、世情には長け、或る勢力はもつて居る『奉賀帳お菜の内へおつゝける』なごの如しで、厄拂へアノ文句のをやつて呉れろなごこ注文が出るので、手間取るのではなからうか。

（二四九）　はやり目の一ト側ならぶ呉服店

『はやり風三井の見世に小半年』の句もある　本句の呉服店を越後屋こ決定したし。

（二八八）　ふせ勢にゑり殘されし笑ひ好

原解は全く思ひ違ひで、吉原の『罪科をいいたて元ごりを女郎切り』になる迄の相談計畫の句でしよう。

（二六七）　ほんどざへ須田高橋はぶつかへり

著者は歴史の句こして長い説明があれご、之れは然らずして十世翁の解に『須田高橋の二家は返り忠をせしもの　博奕打等が旦那遊びの場所に交り來て　金錢をゆすりこる樣なり。

（二九六）　やげん堀ごぶ板迄が一度なり

正解なれご藥研堀は藥師でなく不動さんである。境内が狹いので入口のごぶ板迄お百度をふむだもの、十世翁も道路の片側に大下水あり之れにフタをせし事ありこ言つて居られる

（二九七）　つみ髪の前やくらしい美しさ

柳雨先生の解がのせられ『前厄は十九若後家のぞつこする樣な美しさ』こあり、同書の『二十五こ四十二で込む渡し舟』（三一六）にも、前厄十九こ二十五　後厄三十三こ四十二こあるが、前厄後厄の意味が自分こは異つてゐる。女は三十三男は四十二

を大厄と言ひ、前厄とは三十二或は四十一、後厄は三十四或は四十三、即ち厄年の前後の年を名付けるのである　物集博士の大辭林にもかく出てゐる。

（三一七四）　古着買米あげざるとしめしかご

『古着買のくせに　古着は得買はずにつまらぬがらくた許り買つて來た』とあるが、全く誤りである　且つ下五は誤記であらう。自分は今原本が見當らぬが柳雨先生の記されたものに『しめしかご』とあつて十世翁の解に屑買の如く目籠を擔ぎボロは貫目籠を用ひたりしため、米上げ笊とゝめしかごと見立てよみしなるべしと　あるが正しい。

（四〇一）　おやぶんはのんしくで割をいひ

『のんしといふ口癖　割は理屈』とあるも　これでは何の事かわからぬ　十世翁曰く、のんし！〳〵は越後訛（ふとつめがきかんのんしと越後勢』米搗の親分が越後人のため子分に割を言ふとある

（四二〇）　福山はちとあやふやな傘もかし

これも十世翁の正解が手元にあるから記す　福山とは助六の狂言家櫻廓の達引に出る蕎麥屋の名なり、因て芝居道にては蕎麥を福山と言ふ。助六は蛇の目の傘に限るなれど　吉原通の雨舍りに福山と云ふ蕎麥屋にて貸りた傘は　あやふや破れそうな傘をかして呉れたとなるべしとある　門兵衛が傾城に笑はれ、笑ひ清め　奉たなご騒いで居る所へ　福山のかつぎ米吉饂飩箱を擔ぎ門兵衛に突當るいきさつから　助六が仲裁に入つても承知致さばこそ　逢ん生饂飩を頭からかけられ、鼻へ胡椒を入れられる舞臺の滑稽がある。

（四七三）　うち出しの頃あわ雪はくずをぬり

芝居の方か相撲の方かわからぬとありますが　恐らく後者『角力くづれが泡雪に人の山』『下總の雪を食ひ消す角力客』

（四八一）　よし盛へ鰹がざれておしよせる

二面子博士のお説が記され、和田酒宴であるが『食ひつくら九十三騎に巴かち』『九十三騎へ甲冑の嫁披露』の句もある如く鰹の裏面に狂句臭があつて　烏帽子魚即巴の見立らしく鼻をつく、一寸考へさせます。

（五〇一）　百本の御てんへひゞく御縁日

上野兩大師の御みくじ、百本は觀音籤の數　御縁日は三日十八日。

（五一一）　ひゞくのは箱の音。べつ甲屋くるつた所　繼ぎやり

川柳に現はれたべつ甲屋はえゝ角細工關係があります『べつ甲屋表の御用初にきき』

（五四四）　おちやつぴい節句の禮に二三度來

お轉婆娘が唯　遍では　しやべり足りないと見ねてとあるが、おちやつぴい丈けに雛の酒目當ではないでしようか『雛をほめればのろつこい酒が出る』

（六一一）　錢買て禿はかりをな　に行

禿の借金となつて居るが　花魁が　一寸煙草屋なぞで借りてをいた代を仕拂に　禿がお使ひをするのでは　ありますまいか。

（三一五）　車留きびしいすぢな二つ引

英朋氏の『車の輪か深くめり込むだ痕』との解には贊し得ませぬ』然し自分に確信あるものがない。（十二頁へ續く）

近作柳樽

路郎選

汽車の屋根雪が自然のまゝ積り　神戸　隨帖
つき襟を藝者俥の上でもし　同　同
馴れぬ道提灯固く持つて行き　同　同
脇見せず本を讀んでるいゝ娘　同　同
内職の近う障子に寄り過ぎて　同　同
はや立てゝゐる門松が邪魔になり　同　同
編笠をきて鴈治郎背が高し　螢ヶ池　同
長火鉢女將の胸に燗が出來　同　屏三呂
文化とは別なもぐさの煙が立ら　同　同
それだけのことさ奥歯にきぬをきせ　同　同
病人に同情のない父の聲　同　同
ニッケルに寒う瞳がうつるなり　同　同
あんなのが息子の嫁にしたい母　神戸　吐露樓
意氣投合を見屆けたる仲居　同　同
おごつたかおごられたのか笑つて出　同　同
お婆さん默れば車内しんとする　同　同
引越して近所にこんな人も居り　同　同
行水は電話へぬれたまゝで來る　大阪　靜雲
何時の間か人形鼻が取れて來て　同　同
惡いくせ息子だんゞ父に似て　同　同
階段を社長が上る音がする　同　同
團結をして居る樣なバナゝなり　同　同
きいて來た通りの返事叱られる　神戸　一休
年寄のする事ですとさからはず　同　同
眼に玉子押込む樣に選んでる　同　同
獨身に似合しからず蓄めてゐる　同　同
散髮屋惜しい一手へ客が來る　同　同
女房と語らぬ膳に石を嚙み　同　東洋鬼

戀してるらしい娘の絹團扇　同　同
結ひ上げて見て髪結は少し惚れ　同　同
氣にかゝる夢を髪結輕く消し　同　同
無理を云ふ妾へ米の値を聞かし　同　同
我が顔ど相談なしの嫁探し　堺　佳鳴
散髪屋忙しさうに吸ひつける　同　同
妹を賣つても出世する氣なり　同　同
出戻りは他人の樣な膳につき　同　同
姑のことで女房寢つかれず　同　同
長男の不孝次男を働かせ　神戸　一狂
下宿屋の昨夜のまんま寢間があり　同　同
父親が死んで意見もせない母　同　同
係長時々若い頃を言ひ　同　同

河水清

石一つ動かぬ澄んだ水を見る　同　同
小便をさせて他人の手に渡し　旭川　志貴南
氣味惡く子供の前で世辭を聞き　同　同
日曜の小使中折帽で來る　同　同
女房が留守で近所へ世辭が要り　同　同
眞直に立つと岩頭風があり　神戸　士馬
對座して電燈がつく許嫁　同　同
袷では寒い散歩の日が暮れる　同　同
酒一つ注いで添乳の妻は出ず　同　同
その上を値切るも女心なり　札幌　迷村
何處迄も信じてる妻ふと騙す　同　同
他人だとしみ〴〵思ふ金のこと　同　同
春のよな心で貯めた金でなし　同　同
鰯屋の袋小路をひきかへし　神戸　琴月
飲むことの外は何にも附き合はず　同　同
下宿屋へカズンと見えぬ人が來る　同　同
電話口妾らしさを保ちゐる　同　同
聖書など讀むのかと友見直され　大阪　逸錢
もう夜逃げする氣で今日も飲んでゐる　同　同
學校もすぐ金になる方をより　同　同
自轉車を丁稚は寒う出して來る　同　同
氣がつけば新婚のふたり追ふて居し　同　ひろし
あの人を貰ふときめて蒲團しく　同　同
大島の袷を出させ友と出る　同　同
母親が氣短かくなつてゆく冬　同　同
泣き出した坊を廻轉椅子へ乘せ　東京　葩汀
愚痴を言ひながらも母の手内職　同　同
樂すぎて何か不平を覺えたり　同　同
爪楊子言へば無口な妓が呉れる　大阪　乾坤
結ひ榮えもせぬと髪結思へども　同　同
洗濯へ來客の聲屆き兼ね　同　同
ポヘミヤンちつとやそつと嘘もつき　東京　盜泉
蓮の實はみんな有難さうに飛び　同　同
馬鹿囃子遠くで聞けばちと淋し　同　同
ちと誇りすぎて話が横へそれ　大阪　憲翠
氣嫌良く出して女房は氣にかゝり　同　同

窮泊の底へ　男の子が生れ　同
塗り過ぎた姿で四帖半に遇ひ　京都　文錢
ふと笑ろたときに心のすきが見へ　同　同
反對へ見向きもしない勞働歌　同　聞路
賣場から遁れて乳房つまみ出し　大阪　同
藥局の前で一筋飲んで來る　同　同
御利益があつたのやうで又詣り　同　同
其の後は大根作ろに餘念なく　姫島　眼聲
修身をよんでゐますと女の子　同　同
高鼾の今年中と云ふ話　同　露斗
此の上の貧乏出來るかと笑ひ　廣島　同
隱居する程もお金のたまつてず　同　同
すけなうに返しましたの手紙が來　同　同
烏打をかぶつて嫌に小僧じみ　神戸　ひで一
弟は密柑を抱いて寢てゐます　同　同
霧晴れて畑へ出てゐる人の數　同　山美
眼がさめて總ての音が遠ふ宿　同　同
忙しさ帽子のまゝで走り書　同　嶺月
泊り客あつて寢床がみな變り　同　同
踏み臺にしてよい物が見當らず　金澤　眼隱子
いろ〳〵に慰められて下駄を履き　同　同
籾摺りの音へ手眞似で午をつけ　和歌山　無心
衣食住に不自由のない蹴づかひ　同　同
懷ろに丁稚見本の端が見え　大阪　三平
若殿は錦繪ばかり見てくらし　同　同

借金取と見えるか女美しい　同　一枝
いや〳〵を敎へて其れが癖になり　同　同
心配に一本殘る卷煙草　同　塊佛
痩世帶「主婦の友」から責められる　同　同
欠伸して聞いてゐたのも柏手する　同　夢路
大切な話にしやくりつき初め　同　同
子を抱いて近所のあらを見て歩き　同　山月
仕事着のまんま年禮受けて居る　同　同
兒の笑ふまゝに笑つて仕舞ふ晝　同　しける
しで紐の音にあほむく朝の店　同　同
妹へまさかの時の藝をつけ　東京　秀花坊
恩人に亭主がむごう使はれて　神戸　南天棒
聞き兼て妻にかわつて肩をもみ　同　芙蓉
面會に來た女房へ擧手の禮　島根　木屑
町近うなつて皷をしめ直し　金澤　鹿の子
色男爪の尖まで忘たらず　長野　高峰
男爵の餘りに世事に長け過ぎて　同　奈良藏
孝行に辨當素直に持つて出る　豐中　案山子
斷髮の相談をして叱られた　螢ヶ池　霞人
惡運もつきた其夜はよく眠り　同　花泉子
兒が死んで金もいらない氣にもなり　鶴ノ莊　普天
客もなし行けばよかつたなと思ひ　大阪　炭車
クロスワード又二三人寄つてゐる　同　一鐵
横堀を通つて昔聞かされる　同　駿馬
自分にでも貰ふつもりで母は褒め　同　白蝶

編輯後記

▲新年はお芽出たう。

▲新らしい運動を企劃する春にとつて尤も必要なものは熱と力の充實如何にあることは云ふまでもなからう。そして此二つのものが斷片的であり、思つたよりも微力である時に、それ等の企劃は空想と何等選ぶところがない結果にまで到達する。我が社が三年前に企劃した川柳の社會宣傳、初心者の指導川柳の研究機關として本誌の刊行は、幸ひに愛讀者、寄稿家、同人諸氏の努力が相俟つて月刊斷行、內容の充實、紙數の增加となつて我等の企劃が空想に終らざりしことを喜ぶものである。更に〳〵主義主張のために闘ふべきことを大正十五年の年頭にあつて誓つておきたい。

▲芽出度い事柄をお知らせすれば舊冬十二月、藤本卯之助、三好革郎、馬場月兎の諸氏が新に同人として入社され、松本助六氏が同人として復活された。今後の活躍を祈る。

「讀者の天地」欄新設

小感想、小評論、小批評、其の他希望、不平、質問等等等、何んでもよろしい。中傷にわたらざる範圍のものを歡迎します。

用紙はハガキ。紙上匿名は隨意なれど住所姓名明記の事。本社內「讀者の天地」係宛

▲同人竹內多聞、竹田芦穂、原史風の諸氏芽出度く揃つてお嬢さんを一人加へて新しい春を迎へられた。

▲本誌寄稿家西原柳雨氏の「川江戸歌舞伎」も別稿紹介の通り芽出度く上梓された。柳友各位の御愛讀を祈る。

▲氷原川柳社の田中五呂八氏編著「新興川柳詩集」がいよ〳〵出た。本社でも取次ぎいたします。御一讀を乞ふ。

▲同人河南放馬氏盛んに漫畫を描く、玄人離れがしてゐるとの定評。

▲伊藤夜叉郎氏から「病院漫筆」でもと思ひ候へども云々のお賴りがありました本年は是非共お達者になられるやう祈つて居ます。

▲川村花菱、前田雀郎の兩氏から原稿を頂きましたが締切後で甚だ遺憾に思つて居ます。

▲東垣內滿三留の訃　同氏は十一月五日永眠さる。「鐘が鳴る無事かと今日も鐘が鳴る」の辭世吟あり、痛惜に絕ゑず。

▲本號は松郎、二柳子、啞人、馬行と私で編輯した。

轉居と改號と正誤

▲若林吐露樓氏は神戸市元町五丁目一七四武田方へ

▲牛窓屏三呂氏は大阪市浪速區稻荷町二丁目九六八へ

▲酒井駒人氏は東京市淺草區田島町九六昇日堂東屋方へ

▲井上凡平氏は本名の井上史朗に

▲十二月號「行末の事迄知らぬ紹介所」はのぼる氏の句　（路）

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第三號課題

一月十日締切
（各題二十句以內）

▼人妻　岸本水府選
▼蜜柑　竹田蘆穗選
▼村長　關本雅幽　西垣松雨　共選

第三卷第四號課題

二月十日締切
（各題二十句以內）

▼硯　坂井久良岐選
▼風邪　林田馬行選
▼下宿　岩崎柳路　森田輝翠　共選

毎號募集

▼近作柳樽（五十句以內）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）編輯局選
▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

一部　金拾錢（郵稅共）
六部　壹圓六拾錢
十二部　金　圓

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を選立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は書新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年十二月廿五日印刷
大正十五年一月一日發行

第三卷第一號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸一郎

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋
（東京）東條　（京都）三宅　（神戸）米田
（金澤）石井　（松任）三須　（函館）石森

賀

正

塚林井

崎田上

松馬刀

郎行三

賀正
片山雲雀
大阪市西區本田町一ノ一四

賀正
福島乾坤
大阪市北區玉江町二ノ六

賀正
西村山月
大阪市港區八幡屋町二四八

賀正
田中三平
大阪市西區靱中通一ノ一二
電土二九三六番

賀正
若林吐露樓
神戸市元町五丁目一七四
武田松藤方

賀正
久世一路
大阪市港區北福崎西之町四
電話西八二四番

万よし染筆帖 拔萃

万よしでことづけをきく人に逢ひ　路　耶
やあと万よしの暖簾の内と外　馬　行
ヨーテナと道頓堀のほとゝぎす　三　允
万よしで紙治と太兵衛握手する　水　府
上かんや万よしいつも万がよし

川柳よりもよい男前　久良岐

上かんや時には客に管を巻き　万よし

▲万よし川柳募集

出産　麻生路郎氏選　一月二十日締切
雀岸　木水府氏選　二月二十日締切

一題十句限(天地人)三名白鶴一升進呈

呑む呑まぬは別として川柳家各位の氣焔と
洒脫なる隨筆を待つものは
道頓堀で一番小さい上かんや

新戎橋

万よし敬白

賀正

大塚可兒人

大阪市東淀川區本庄町七六

賀正

畑田炭車

大阪市浪速區北霞町九六八

賀正

河南放馬

賀正

高橋かほる

大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九六番

賀正

竹田蘆穂

大阪市港區八條通二丁目南小路

賀正

吉川啞人

大阪市港區八條通二丁目北小路

南海電車

賀正

池澤樂居

大阪市天王寺區石ヶ辻一二一

柳友諸兄へ＝ふだんは御無沙汰勝ちで失禮して居ります
本年もどうぞよろしく願ひあげます

賀正

黑木莢豆

西宮市與古道町
三二地黑木寫眞館

新年お芽出度う新らしい
川柳家諸兄と文通を希望

安井ひろし

大阪市南區安堂寺橋
通り四丁目卅七

賀

正

岩崎柳路
東京市芝區宮愛町一ノ一六大成社內
電話青山四一九一

西垣松雨
大阪市東淀川區南濱町一九四

森田輝翠
大阪市天王寺區生玉前町八〇

關本雅幽
大阪市港區鶴町三丁目一一〇

橋本一柳子
大阪市港區八條通二丁目十一

謹賀新年

—平素は御無沙汰ばかりいたしまして濟み
ません本年も相變らず御交誼を願ひます。

丙寅元旦

原　史　風

大阪市北區南同心町二

賀正

川柳溪花坊編輯

第三種郵便物認可・毎月一回一日發行

大大阪

普通號四十頁前後・表紙毎號漫畫大家

新年號も普通號も・（一部金拾五錢）

第三卷　新年號

倍大頁▲表紙繪題字竹久夢二畫伯木版十度刷凸版寫眞版數個挿入▲向上慾に燃ゆるが如き各作家の精選せる創作句と▲先輩諸氏及新進作家の研究文と雜文は時代が語る不朽の寶庫なり▲是非新年號の大大阪を（溪）

發行所　大阪市北區老松町　電話北二四五八番　大大阪川柳社

謹賀新年

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術印刷百般

藤本兄弟社

大阪東區農人橋二丁目

電話東一七〇番七七〇番

賀正

柄も仕立もきっとお氣に召す洋服屋
本年も相變らず御引立を願ひます

植村洋服店

大阪市南區高津町四番丁
（下寺町停留場半丁北之辻西）

謹んで新年を賀す

糖尿病新藥

インスメリチン Insmellitin

本劑 は本研究所創製にかゝる二種の獨立特効藥（各種糖尿病に對し）**パホミン**「膵臓抽出物」と**ヤタロン**「五加科植物抽出物」とを主藥とする錠劑なり

特色 **パホミン**は簡單なる徑口的攝取により安全に血糖及尿糖を容易に〇、二以下に降下せしめ得、**ヤタロン**は器質的病變に及ぼす根本的恢復整調作用を司る

▼日常の生活に拘束を加へず▲ 副作用絶無

適應病 各種糖尿病、腎臓病兼糖尿病、結核兼糖尿病、糖尿病に起因する口渴、饑餓感、瘙痒、癤常習便滯、不眠症

包裝 **インスメリチン錠** 九〇錠入（一三圓十五日分）一八〇錠入 二五圓（卅日分）

腎科專用 Pahomin + Yatalon = Insmellitin

Paheminpul. 25gr. 50gr. / Yatallonpul. 50gr. 100gr. の御注文は發賣元へ乞ふ

發賣元 大阪市東區仁右衛門町二八八 **熊谷英商店** 電話東三五一四 振替口座大阪七一〇一三

製藥所 大阪市東區仁右衛門町二八八 **熊谷糖尿病腎臓病研究所**

（概說實驗及抄錄進呈）

一手特約店

東京 銀座 松屋吳服店新藥部

大阪長堀橋 高島屋吳服店新藥部

名古屋中區 松坂屋新藥部

御慶

春をゆつくり書齋でお過ごし下さるやう……

お讀みものゝ御用は是非私どもへ仰付下さい。一寸お端書か、お電話下さいますれば直ぐさま參上いたます

一月一日

社主　藤堂卓

謹白

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

坪内逍遙博士序
岡田三面子博士跋

西原柳雨氏著

川柳江戸歌舞伎

四六判特製美本
參圓五拾錢
送料拾八錢

本書は古川柳研究の大家西原柳雨先生が十年の精嚴研鑽を經て成れる大著にして坪内博士は「此書は其一面が歌舞伎の側面史料であると共に他面は古川柳の難句解であり評註である、いやまだある、此卷を翫味精讀するの結果は江戸民俗研究の端でもあり、又人情の機微を知る緒でもある」と稱揚し、小村欣一侯は「先つ第一に著者の努力に一驚を喫し史料としても社會觀としても又劇の側面觀としても貴重なる資料たり」と激賞せられたり以て其内容の如何に充實し完整せるかを知るべし・川柳に志す人、好劇の士は勿論苟も江戸文學研究家の座右に缺くべからざる寶典なり

發行所　春陽堂
東京市日本橋區四丁目五番地
振替東京一六一七番

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十四年十二月二十五日印刷　大正十五年一月一日發行

第三卷　第一號　（第二十四號）

定價金參拾錢

よろこびにそへて白鶴屆けこき
榮轉の今日も白鶴呑み續け
白鶴がいつものバーへ運ばせる

清酒

攝津灘

嘉納合名會社釀